329
648

始

螺
御歩
二人
大鼓
御歩
一人
武者奉行
二人
御歩小頭
新番小頭
御歩
四十人
小頭
二人
御歩
一人
新番
四十人
四組
表小將
番頭
表小將
十人
御弓鉄
才一組
御射手小頭
十人
御弓鉄
才二組
御射手
才一組
御異風小頭
十人
御射手
才三組
御射手小頭
小頭一人
御異風
小頭
廿五人
大組足輕
才三組
殿足輕
表小將番頭
大小將
六組
九十人
大小將組頭
大小將番頭
大小將組頭
大小將番頭
大小將組頭

特231
659

金澤のれきし

はしがき

「かなざは」といふ言葉。その言葉の中に、何となつかしいひゞきがこもつてゐることでせう。

朝に名峯白山を仰ぎ、夕に犀川・淺野川の清流に心をすまし、幾百年來、父祖相傳へて來た、この金澤の地。

ずつと昔、山崎村などといはれてゐた時代のおもかげは、しのぶよすがもありませんが、國寶石川門の白壁は、前田氏居城の名殘を止め、名勝兼六園の池水は、百萬石大藩の誇を物語つてゐます。しかも今、近代都市として教育に、產業に、市街の設備に、ます〳〵發展のあとを示し、躍進途上の都市として、しきりに附近の町村を合併し、人口すでに十八

萬、日本海方面第一の大都會である面目を、更に一段と高めたことは、私ども金澤人の大きな喜であり、誇であります。

金澤の少年少女である皆さん。皆さんは、かつての山崎村が、この大金澤となるまでの數百年間、幾多の移り變りを經て來た面白い物語を聞きたいとは思ひませんか。「知るは愛するの始である。」といひます。將來、金澤市を背負うて立つ皆さんに、ぜひ、この金澤の歴史を知つておいてもらひたいものと思ひます。

この本は、子供の讀む金澤の歴史であります。金澤の歴史を、かんたんに、わかりやすく、そして面白く書いたのが、この本であります。

これによつて、金澤の歴史の大体が、皆さんの心に植ゑつけられ、やがて、芽を出し、枝葉をのばし、「かなざは」を深く愛し、ます〳〵發展

させようとする心のもととなることが出來るやうにと、ひそかに念じ祈るものであります。

尙、この本は、百三十頁足らずのうすいものではありますが、出來上るまでには、隨分多くの人々の御世話を受けました。本文は、井野口・森・米田・高橋四先生の手になり、表紙は上野先生、挿繪は南先生をわづらはしました。

又、侯爵前田家からは、特に、門外不出の繪卷物の一節、利家公出陣の見事な繪の寫眞原版をいたゞきましたことは、この本の最も誇とする所であります。

こゝに記して、侯爵家の御厚意、各先生の御勞苦に對して、厚く御禮

申し上げる次第であります。

昭和十一年十月

金澤こども文化會々長

毎田周治郎

目次

一　尾山城の起るまで……一
一　芋掘藤五郎……一
二　小立野臺……八
三　蓮如と御山御坊……一〇
四　謙信との戰……一七
五　寺から城へ……二二
六　尾山城下……二五
二　百萬石の城下……二八
一　武勇すぐれた前田利家……二八
二　加賀百萬石の基……三二

三　金澤城を築く……三八
四　城下の發展……四二
五　美術工藝盛となる……四七
六　榮える學問……五三
七　世に名高い兼六園……六〇
八　西洋風の學問と兵備……六四
九　勤王の人々と藩末の改革……六七
十　越後の戰と招魂社……七四

三　明治以後の金澤……七九
一　衰へかけた金澤……七九
士族と町人……七九
縣廳の移轉……八三

二　回復への努力……八五
金澤營所のはじめ……八五
寺町と特科隊……八八
教育都市として……九〇
鐵道の開通……九二
盛になつた產業……九五
三　躍進途上の金澤……九七
明るくなつて行く市街……九八
人力車から電車へ……九九
水道と鋪道……一〇一
四　無上の光榮……一〇三
順德上皇の神靈還御……一〇四
明治天皇の行幸……一〇五

皇太子殿下の行啓……一〇七
陸軍特別大演習……一〇九
五　大金澤の建設へ……一一〇
附　年　表……一一三
前田氏系圖……一二四
歴代金澤市長……一二四
金澤市地圖

金澤のれきし

一　尾山城の起るまで

一　芋掘藤五郎

金澤の名の起りについて、面白い言傳へがあります。

今、金澤の一部となつた山科町が、山科の里といはれてゐたずつと昔のこと。その村はづれの、小さなわらぶきの家に、藤五郎といふ一人の若者が住んで居ました。毎日、山へ行つては山のいもを掘り、それを賣つてくらしをたててゐましたから、村の人たちは、芋掘藤五郎とよんで

ゐました。藤五郎は、心の美しい、少しも慾のない人で、いもがたくさんとれると、大方、村の人にやつてしまつて、その喜ぶのを見て、自分の樂しみとしてをりました。それで村の人たちから「藤五郎さん〳〵」と大そううやまはれてゐました。

或日、山から歸つて來ると、自分の家の前に、りつぱなみなりの老人と、美しい女の人とが立つて居ました。藤五郎は、ふしぎに思つて近よつて行きますと、老人は、藤五郎を見つけて聲をかけました。

「あなたは藤五郎さんとおつしやる方ではありませんか。」

「はい、私は藤五郎ですが……」

「やれ、うれしや、有難や。やつぱり觀音樣のお告はほんたうでありましたわい。」

老人は、をどり上つて喜びました。あつけにとられて、藤五郎が、たまじ〳〵とこの樣子を見て居りますと、やがて老人は

「私は、大和國初瀨村に住んでをる生玉の方信といふ者でございます。觀音樣のお告によつて、はる〳〵この村にたづねてまゐりました。それは、『加賀國山科村に、藤五郎といふ若者が住んで居る。家は貧しいが、心はいたつて淸らかであるから、お前のむことしては、申し分のないよい男だ。急いで尋ねるがよい。』との事で、この和子を連れて、かうして參つたわけでございます。今、目の前にあなた樣を見まして、私は、たゞもう、うれしくてたまりません。さ、どうかこの娘をもらつて下さい。」

と、喜びにほゝをかゞやかして話をし、かつ賴みました。

藤五郎はいよ〳〵驚いて

「とても、私は、そんな……」

と、ことわらうとしますと、老人は

「いや〳〵、何とおつしやつても……」

と、どん〳〵荷物を家の中へ運びこみますので、藤五郎はあきれながらも、日頃信心してゐる觀音樣のお告であるといふ事でもあるしと思ひ、とう〳〵この娘をもらふ事にしました。

藤五郎は、思ひがけずお嫁さんをもらひましたが、その持つて來たきれいな着物や、りつぱな帶などは、惜しげもなく村の人たちにわけてやりましたので、相變らずの貧乏ぐらしでした。しかし、二人はいたつて仲むつまじく毎日々々を送つて居りました。

或日のこと、大和國から、どつしり重い袋が一つ屆きました。開いて見ると、中には金の小粒が一ぱいはいつてゐました。

「ほう、美しい色に光つてゐるわ。有難いお心ぢや。だが、いもを掘つてゐる身分には何の用もないものだ。」

と言ひながら、その袋をもつて裏の田圃へ出ました。ちやうどそこへ、五六羽の雁が下りて來たので、

「それ、金をやるぞ。」

と言つて、ばら〳〵と投げかけました。これを見た妻は、驚いて、

「大切なたから物を、田圃へ捨てるとはもつたいない事です。」

と言ひますと、

「なあに、これと同じい物は、山でいもを掘る度に、いつも出て來るの

芋掘藤五郎

さ。わしは毎日見てゐるが、いらないから取つて來ないのだよ。あしたは取つて來て見せて上げよう。」

と、事もなげに言ふのでした。

次の日、藤五郎はいつもの様に山へいつていもを掘りました。まつ黑な土の中から、ぴかり〳〵と金の粒が、掘る度に出て來ました。それをかごに入れて歸つて來る途中、きれいな水

のわき出てゐる澤で、靜かにふるひました。土はだん〳〵流れ出て、かごの中にも水の底にも金の粒がきら〳〵と光つて見えました。

家に歸つて妻に見せると、大變びつくりしました。村の人たちもそれを聞いて驚き、忽ち大ひやうばんになりました。そして、誰が言ふともなく、その澤を、金を洗つた澤だから「金洗澤」といふやうになりました。

今、兼六園内にある金城靈澤が、このお話の金洗澤で、金澤の名は、金洗澤のまん中の字をはぶいたものであるといふのです。

これは、たゞかうした言傳へでありますから、正しい歴史の本にはのつてゐないのですけれども、藤五郎夫婦の木像が、野田寺町の伏見寺に

安置せられてあり、金澤の人たちは、皆、これをなつかしい物語として傳へて來たものであります。

ついでに、「金澤」のことを、實際には、「かねざは」といふ人と、「かなざは」といふ人とあるので、どちらが正しいのだらうと疑はれますが、それは「かなざは」の方がほんたうなのです。すでに、今から三百五十年前に書かれた豐臣秀吉の手紙には「かなざは」と假名書きしてありますし、それから後も「かなざは」と言はれて來ました。それで現在、停車場の驛名を書いた建札も、「かなざは」となつてをります。

二　小立野臺

さて、藤五郎のお話はいつの頃とも言はれませんが、今から五百年程前には、この地方一帶は、まだ餘程さびしかつたに相違ありません。その中、今の小立野臺は、水害におかされる樣な心配もありませんから、最も早く人の住んだ所らしく、あちらにぽつつり、こちらにぽつつりと家があつて、村の人たちは、その麓にある田や畠を耕してくらしをたてゐた事でせう。此所は、土地が高く、空氣が清らかにすんでをります。又、山といつてもそんなに高くはない丘なのですから、麓の田や畠へ出かけるにも樂でした。そんなわけで自然に人が移り住んで、家數もだんだんふえたものと見えます。それらの村を何といつたかは、全く知られてゐませんが、後世に殘された地名から推して、今の金澤城あたりが金澤、それから東南につゞいて山崎などゝいはれてゐたやうであります。

いづれにしても、その頃は、夜が明ければ田や畠へ出て働き、日が暮れゝば月影をふんで家に歸るといふ、まことに心おだやかなくらしをつづけてゐたものと思はれます。

三　蓮如と御山御坊

かうして、それらの村人たちに平和な年月が流れて行く中に、京都の方から、りつぱな僧が次々と來ては、佛の教をねんごろに說聞かせてくれました。村人たちは、その有難い教にます〳〵心が和いで、毎日々々を安らかに樂しく暮らしてゐました。併し、やがて世の中がだん〳〵さわがしくなつて來ました。あちらでもこちらでも戰爭が起つたのです。中でも京都で十一年もかゝつた應仁の亂といふ大きな戰があつた後は、日本國中がみだれにみだれて戰爭が絕え間なく、戰國時代と言はれるあさましい世の中になりました。

せつかくつくつた田や畑も、戰爭があるとすつかり荒されてしまひます。時には家も燒き拂はれてしまふことさへありました。人々は一日として安らかな氣持でくらしをすることは出來ませんでした。こんな時、京都から來て人々に佛の教を說き、安心をあたへられたのは蓮如でありました。

蓮如は、京都の本願寺に生まれました。生まれつき大へん賢い上に、いろ〳〵の苦しい事にたへしのんで、學問と修行にはげみましたから、つひにすぐれた名僧となり、其の名は四方にひゞきました。蓮如はどうかしてその祖親鸞の開いた淨土眞宗（一向宗）の教をひろめて、人々の心

を救ひたいものと、かたく決心をしました。

その頃、京都は大そう亂れてゐたので、蓮如は地方へ佛の道を傳へようと、文明年中、越前國に來ました。そして、加賀の境に近い吉崎といふ所に寺を建てて、教を說きました。

蓮如は、說教が上手で、一度その教を聞いた者は、皆しみ〴〵佛の有難さを感じてすぐにその信者になりました。又、文も非常にたくみで、教を說いたその文章を讀むと、誰でも自然に頭の下る思がしました。

「吉崎へ有難い上人がお出でになつた。生佛樣ぢや。」

噂は噂を生んで、何百、何千といふ人々が、毎日々々、吉崎御坊へおしかけました。さびしい村里であつた吉崎が、忽ちにぎやかな町となりました。

蓮如が加賀金澤の地に來た

蓮如と御山御坊

蓮如は、此所で十分に教をひろめる事が出來たので、さらに進んで加賀に入り、あちらこちらで教を說きましたが、やがてこの金澤の地へも足をふみ入れました。

蓮如は、杖を金澤の地にひいて、その丘の上に立ちました。

「おゝ、廣々とした加賀平野。綠の田畑、散りしく村里……」

思はずひとりごとを言ひなが

ら、さらに向かふの河北潟、砂丘のかなたにひろがる日本海の青海原などに見とれました。

今立つてゐる地の、右手にも左手にも小高い丘がならび、その間を犀川・浅野川の二つの流がうね〳〵とぬつて行く。さらに後をふり向くと氣高い白山に續く山の峯々が、空をかぎつてながめられるのでした。蓮如は、我を忘れてこの美しい景色に見とれてゐましたが、やがて、その眼はいき〳〵とかゞやき、その口元は心地よげにほころびました。

「寺を建て、教を説くには、まことに得難いよい地ぢや。」

それからしばらくたつて後、新に信者となつた村人たちによつて、今の金澤城の本丸の地に、りつぱな寺が建てられました。寺が出來上ると、近くの村々から大勢の人々が參詣して教を聞き、口々に「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」と唱へて喜び信じ、はては、寺の近くへ我も我もと移り住み、吉崎におとらぬにぎはひとなりました。この寺を御山御坊或は金澤坊舍、金澤御堂ともいつて、その前後に加賀國一帶にひろまつた一向宗中心の寺として、人々から厚く敬はれました。その頃、蓮如は尙生きてゐましたから、如何にその喜びが大きかつたかを思ひやられます。

かうしてだん〳〵勢づいてきた御山御坊では、本願寺から來た武士と僧とが頭になつて、教を弘めると共に、さらに加賀國全体をひきすべようとしました。ところが、加賀の地には、古くから富樫氏が勢をはつてをりました。富樫氏は、その勢に取つて代らうとする一向宗を、だまつ

て見て居るはずはありません。兩方の間が、次第に面倒になつて、とう
とう戰爭を引起してしまひました。

この戰は、はじめから一向宗の勢が鋭く、一せいにふるひたつて富樫
の城高尾山を攻めたてたので、總大將富樫政親は、つひに支へきれず、
腹を切つて死に、部下の將士も多く戰死して、さん〳〵の敗北となり、
久しく加賀の地を治めてゐた富樫氏も、すつかりおとろへました。それ
は長享二年、今から凡そ四百五十年前の出來事です。

富樫氏の殘つた一族が僅かに其のすぢをつたへてゐましたが、しばら
くたつて一向宗徒に攻められ、つひに傳燈寺で全く亡んでしまひました。
今でも傳燈寺に其の墓が殘つてゐます。

これから後、一向宗の勢は急に強くなり、加賀一帶を忽ちその手にを
さめ、越前の大部分までも攻め從へ、越中へもしば〳〵攻入りました。
その命令の、御山御坊から出されたのは、言ふまでもありません。

御山御坊は、又、よく加賀の地を治め、教を弘めたので、他の國に比
べると、國内の人々は幸福でありました。この土地を通る他國の人々は、
口々に「加賀はまるで極樂ぢや。」といつてうらやんでゐたさうです。

四　謙信との戰

ちやうどその頃、越後の上杉謙信は、京都へ上つて天下に號令したい
ものだと思つてゐました。京都へ上るには、どうしても加賀の地を通ら
ねばなりません。ところが、此所には御山御坊が、すでにしつかりした
武力を持ち、なか〳〵の勢をはつてゐます。もし、御山御坊が、通せ

ないといつて手向かひをするやうな事があつては困るといふので、超賢といふ僧を使として御山御坊によこし、仲よくしようといふ相談をさせました。超賢は、名のとほり賢い上に、說きつける事の上手な僧であつたから、うまく話をまとめ、御山御坊は謙信に手向かひしないといふ事にしましたので、謙信は、安心して加賀を通り、京都までを往復することが出來ました。

しかし、昨日まで味方であつたものが、今日は敵となるといふのは戰國時代の習です。御山御坊も、いつか謙信との間にすきが出來て、つひにいくさをする事になりました。御山御坊の杉浦壹岐は、加賀軍の將となつて自ら兵を率ゐ、越中に進んで、謙信の軍と戰ひ、これを打破つて勇名をとゞろかせました。その後、たび〳〵戰つて、互に勝敗がありましたが、天正四年の冬、謙信自ら大軍を率ゐて加賀に攻入り、津幡の附近に陣をしいて勢を示しました。

その日は、特にきびしい寒さで、吹雪が物すごく荒れくるつてゐました。越後の武士たちは、あまりの寒さにふるひ上つて、村の家々へはいりこみ、どん〳〵火をたいてあたゝまつてゐました。身体はだん〳〵ぬくもつて、武士たちはすつかりよい氣持になり、こつくり〳〵居眠りしはじめ、はてはごろりと横になり、やがてあちらの隅からも、こちらの隅からも、ぐう〳〵と高いびきが聞え出しました。

この時、不意にすさまじいときの聲が、吹雪の音にまじつて聞えてきました。皆は、はつとして飛起きて耳をすましました。「うわあつ」とさけぶ聲は、波の樣にだん〳〵近づいて來ます。「さては。」と外へ飛出

した時には、すでに何百といふ軍勢が、手に〳〵槍や刀をひらめかしながら、目の前へせまつて來てゐました。加賀の軍です、一向宗の軍です。

謙信は、

「しまつた。夜討をかけられたか。」

と、齒がみをして殘念がり、「かゝれ〳〵。」と、聲をからしてはげましましたが、不意を討たれた將兵たちは、吹雪の中に、たゞ、うろたへさわいでゐるばかり。勢にのつた加賀軍は、なだれの樣に斬込んで、無二無三に突立てましたので、越後方はさん〴〵にうちまくられ、生殘つた者もちり〴〵になつて、命から〴〵逃げ歸りました。戰にかけては神樣の樣に思はれてゐた謙信を、かうして、物の見事にうちまかしたのですから、加賀の人々は手をたゝいて喜び、

越後をとりやる輝虎さんは、

關東表はお照らしやるが、

加賀の槍にはお曇りやる。

とうたひました。輝虎といふのは謙信の本名であります。

その後、謙信は、能登に入つて七尾城を圍み、之を攻落し、その勢で再び加賀に侵入し、松任城を圍みましたが、それはつひに攻落すことが出來なくて、城主と仲直りをしました。

さすがの謙信も、加賀軍の強いのには困つてゐましたが、御山御坊の方でも、この戰の上手な謙信を、いつまでも敵とするのは大變苦しいので、つひに仲直りをしました。謙信は、兵をまとめて越後へ歸りました。

五　寺から城へ

此の頃、織田信長が、越前國に攻入つて一向宗の人々を打破り、さらに柴田勝家等を先手として進んで加賀に攻入つてきました。一向宗徒は見る〳〵打破られ、忽ち江沼・能美の二郡が從へられてしまひました。

かうして、加賀の北の方は謙信の味方となり、南は全部信長の領地となり、信長と謙信とは手取川をはさんでにらみ合つてゐました。今にも戰爭が始るかと思はれましたが、信長は急に京都の方へ引返したので、謙信も越後の方へ歸つてしまひました。さうしてまもなく謙信が死んでしまつたのですから、加賀における信長の勢は急に強くなりました。

柴田勝家が總大將となり、前田利家・佐久間盛政が部將となつて、すでに領有されてある南加賀を根據にして、さらに進んで北加賀を平定しようとしました。北加賀で最も目につくものは御山御坊であります。勝家は、佐久間盛政に命じて御山御坊を攻めさせました。

盛政は山手の方から、勝家の一族柴田勝成は海岸から、ぢり〳〵と北に進み出しました。道々一向宗の寺を打破り、つひに二手が合して御山御坊を取圍みました。盛政は小立野から、勝成は今の大手町の方から、また拜郷五左衞門の一隊は犀川方面から、ぐる〳〵卷きにして攻めたてたのです。

御山御坊では、主將松永丹波以下、死力をつくして防ぎ戰ひましたが、寄手は名に負ふ鬼柴田の軍勢、しかも、目に餘る大軍で攻めたてるのでなかなかの苦戰となりました。御坊きつての豪傑とうたはれた平野甚右衞門

は、大身の槍をふりまはして、寄手の軍にわつて入り、あたるをさいはひ突倒しました。その勇ましい武者ぶりには、敵も味方も感心しないものはありませんでしたが、つひに取圍まれてはな〳〵しい討死をとげました。その場所が、今でも甚右衞門坂といはれて、勇士の名を殘してゐます。

戰は、御坊方がさん〳〵の敗戰となりました。門といふ門は皆打破られて、寄手は、潮の樣になだれこんで來ました。

加賀一帶をとり治め、威勢の大へん盛であつた御山御坊も、かうして全く織田軍の手にうばはれてしまひました。時に天正八年、富樫氏が亡びてから九十三年目で、一向宗の勢は、この後すつかり衰へました。

六　尾山城下

御山御坊が占領せられたので、加賀の地は全部織田軍の手によつて平定せられました。信長は、このしらせを受けて大そう喜び、今度の戰に一番手からのあつた佐久間盛政に、御山御坊と、石川・河北二郡の地、十三萬石を領地としてあたへました。

盛政は、喜んで御山御坊を自分の城に作りかへました。柵を立てたり、堀をめぐらしたり、土を盛つてとりでを作つたりして、すつかり城としての構を固め、名も尾山城と改めました。

城が出來上ると、盛政の家來たちは、城の中やそのまはりに、それぞれ屋敷をもらつて家をかまへましたので、塀をめぐらした多くの武士の

家が立ちならびました。すると、これらの武士を目あてに、商人が方々から移り住んで來ましたので、城のまはりは家數が大そうふえ、にぎやかな町になりました。

西町・堤町・南町・金屋町・松原町・安江町・材木町・近江町の八町が、金澤市の始をなす町で、その頃、これを尾山八町といひ、後々までも大切な町、金澤の中心の町になりました。しかし、これらの町は、今のこの名の町とは大分場所がちがつて居り、堤町などは城の中にあつたものです。南町は城の南にあり、西町は城の西にあつたから、そんな名がついたものでした。

金澤の町は、かうして、尾山城下としてだん〳〵發展しました。佐久間盛政が、この城に居たのは四年にわたりましたが、有名な賤嶽の一戰にやぶれ、やがて、百萬石の藩祖前田利家が入城することになつたのであります。

二　百萬石の城下

一　武勇すぐれた前田利家

前田利家は、尾張の荒子といふ小さい城で生まれました。父は、その荒子城の城主であつたのです。幼名を犬千代といひましたが、人なみすぐれて賢く、また勇氣もあつたから、父は「この子は後にきつとえらくなるだらう。」と、喜んでゐました。

十四歳の春、織田信長の小姓となり、かひ〴〵しく働きましたから、「犬千代、々々々。」と、大そうかはいがられてゐました。

その年の秋、信長に從つて、海津の戰に出かけました。僅か十四歳の少年が、鎧かぶとに身をかため、槍を小脇にかいこんで、たづなさばき

もあざやかに、かつ〴〵と馬を進める武者振りは、如何にもけなげに見えました。

いよ〴〵敵陣に近づきました。犬千代は、ぴゆう〴〵と体をかすめて飛ぶ矢にはびくともせず、槍を兩手ににぎりしめ、「わつ。」と叫んで敵の中へをどりこみました。すると、一きは強さうな武士があらはれて、

前田利家

「何だ、見れば子供ではないか。小しやくな奴。どれ、一突きにしてくれよう。」

と、槍をひねつて向かつて來ました。

「何を。よい敵だ、さあ來い。」

とばかり、兩人は、はげしく突合ひました。やがて敵が「やつ。」と一聲叫んで突出す槍を、うちはらつて、飛蝶のやうに手元へをどりこみ、さつと胸板を突きさすと、敵は馬から仰むけにころがり落ちました。犬千代も、つゞいて馬から飛下り、す早くその首をかき切つて、信長の所へ持つて行きました。信長は、十四歳の少年が、しかも初陣に、こんなりつぱな手がらをあらはしたのに大そう感心して、これからだん〳〵重く用ひるやうになりました。

犬千代は、その後次第に功をたて、名も孫四郎と改めました。稲生の戰に、敵が間近くなると、まつ先に進み出て、

「前田孫四郎、一番槍々々々。」

とおめき叫んで突進しました。この時、敵の宮井勘兵衛といふ豪傑が、こちらをねらつて、さつと矢を射かけました。それが孫四郎の右の眼の下にぐざと突きさゝりました。その矢をぬかうともせず、「おのれ。」といひざま敵陣にをどりこみ、鬼神のやうに荒れくるひ、宮井勘兵衛を見つけてとびかゝり、つひにこれを突倒して本陣に引上げました。

信長は、勘兵衛の血だらけの首を受取り、馬上に打振りながら、

「この、前田孫四郎のりつぱな働を見よ。」

と大音聲で呼びました。家來たちは、皆これに勵まされて、一せいにふるひたつて戰つたので、少い軍勢で、敵の大軍をさん〳〵に打破ることが出來ました。この後孫四郎は、名を又左衛門と改め、その武名はいやが上に高くなりました。

永祿四年、信長が、美濃の齋藤氏を攻めた時、利家は「首取り足立」

といつて恐れられてゐた、足立六兵衞といふ剛勇無双の豪傑と戰ひましたが、はげしい組討の後に、とう〳〵六兵衞の首を打取りました。この頃から利家は、「天下第一の槍」とうたはれて、その武名は天下にとゞろいたのであります。

二　加賀百萬石の基

利家は、これまでのたび〳〵の軍功により、天正三年には、越前國府中の附近三萬三千石を領するやうになりました。府中は今の武生であつて、北陸本道を前にした要害の地でありました。その後も、信長に從つて近畿の各地に戰ひ、又、秀吉と共に、中國の鳥取城を攻めたこともありました。それらのどの戰でも、目ざましい働をしたので、つひに天正九年八月、信長から能登一國を與へられました。そこで、越前から能登に移り、今の七尾町の小丸山に城を築いて、能登全体を治めました。この城は丘の上にあつて、そこからは七尾灣の風光が手に取るやうに見え能登島の美しい様子もながめられるほんたうによい所でありました。

翌天正十年、信長が明智光秀に殺され、羽柴秀吉が中國から引返して來て、光秀を討取つてからは、秀吉の威勢がにはかに高くなりました。織田家第一の將であつた柴田勝家は、心安からぬ事に思ひ、秀吉を除かうとし、その翌年の天正十一年、尾山城主佐久間盛政を先鋒として、近江の賤嶽に陣しました。利家は、秀吉とはふるくからの友だちであり、また勝家ともよく知合つた仲ですから、その立場に困りましたが、勝家の

賴みを受けて、その味方として出陣してゐました。

この戰は、柴田方さん〳〵の敗北となり、勝家は自殺し、盛政は捕へられて、後に殺されてしまひました。利家は、非常な困難をしのびながら、やうやく越前國へ退き、もと自分の居た府中の城にたてこもりました。秀吉の軍は、そのあとをしたうてせまつて來ました。しばらく兩方が鐵砲をうちあひましたが、やがて、寄手はさつとあとへ退き、秀吉ただ一人、馬に乘つて城に近づいて來ました。敵も味方も、その大膽なのに驚きあきれましたが、やがて城内へみちびき入れました。秀吉は利家に對面し、

「おゝ、前田又左衛門、久しぶりであつた。今度の戰では、敵味方となつて爭つたが、もと〳〵二人は若い時からの親しい友だち。これから後は、またもとの通り仲よくして行かうではないか。」

と、何のこだはりもなく申しました。利家は涙を流して、秀吉の友情に感じ、この後はいつまでも仲よく手を取合ひ、助け合つて行かうと誓ひました。

それから二人は、兵をひきゐて越前から加賀に進み、盛政の居た尾山城をはじめ、國中のとりでを全部手に入れました。この時の功により、利家は、秀吉から石川・河北二郡を與へられたので、七尾の小丸山城から尾山に移り、同時にその子の利長は、松任の城主となりました。百萬石の城下となる金澤の礎は、こゝに築かれたのであります。

しかし、加賀の隣の越中には佐々成政といふ強い大將が居り、利家とは大そう仲が惡く、折があつたら加賀に攻入り、前田家を亡してしまは

利家が末森城へ向かつたつか（侯爵前田家藏）

うと恐しい目でにらんでゐました。つひに其の時期が來たと見え、天正十二年、一萬餘の軍勢をひきゐて、加賀と能登の境にある末森城に押しよせました。末森城には、利家の家來奥村永福が立てこもつてゐました。

永福は、部下の將士をはげまし〳〵、一心不亂に防ぎ戰ひましたが、何分多勢に無勢、しかも不意をうたれたので次第にうちやぶられ、三の丸、二の丸は既に落ち、殘るは本丸だけとなりました。

利家は此の時金澤にゐましたが、しらせを受けると同時に、疾風の如く末森城にはせ向かひました。そして成政軍のうしろから大聲にさけびながら縱横無盡につき立てました。城中の將兵もこれに力を得て、ときの聲をあげて突進して出ました。

非常にはげしい戰がつゞけられましたが、つひに前田軍が大勝利を得ました。成政軍は七百五十餘の死者を出して越中に退却しました。

此の戰は、前田家の興るか亡びるかの分れ目である大切な戰でありました。此の戰に勝つてから前田家の地位は非常に安らかになり、やがて

秀吉の軍と共に越中に進んで成政を降參させました。

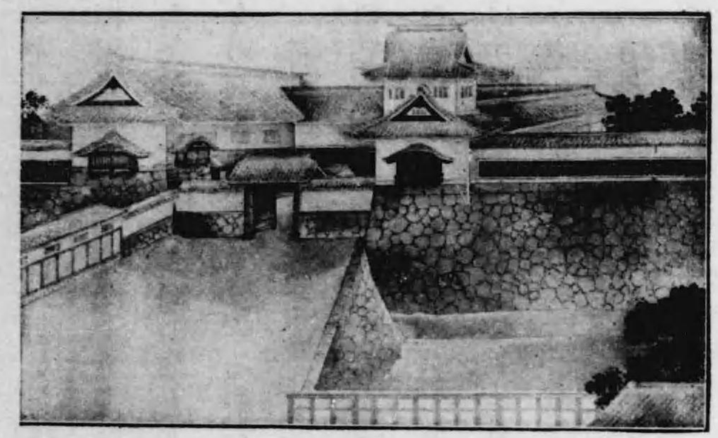
三　金澤城を築く

利家の入城した頃は、城といつてもまことに粗末なもので、土塀の代りに柵をめぐらしてあり、石垣の代りに土を盛上げてあるにすぎず、建物の數も少くて、以前の御山御坊を、利家の住居とせねばならぬといふ程でありました。利家は、何とかしてりつぱな城を築きたいものと考へてゐましたが、幸ひにもその頃、家來の中に城を築くにすぐれた腕を持つた人が二人居ました。一人は高山長房(南坊)といひ、一人は篠原一孝といひました。命を受けて、二人は相ついで城を築くことに力をつくしました。

先づ、城で一番大切な石垣。これにいる澤山の石は、遠く戸室山から掘出して運びました。大きな石には、きれいなかざりをつけて、大勢の人夫が、木やり音頭の節も面白く、調子をそろへて引いて來たもので、今の石引町あたりは、その石引きでにぎはつた通でありました。

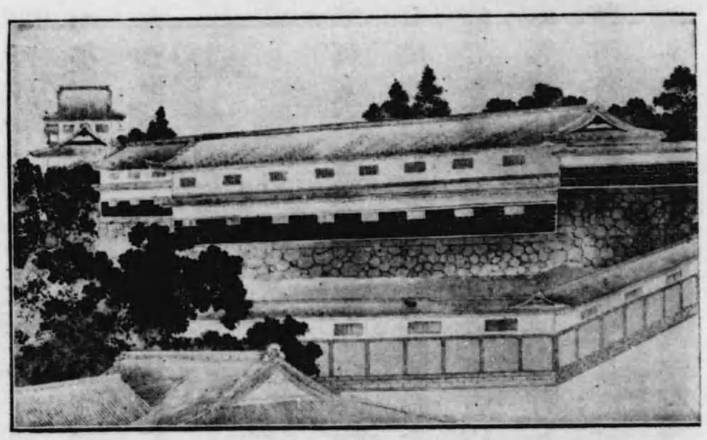
石垣が出來上ると、城のまはりに相ついで堀が掘られました。百間堀・白鳥堀・大手堀・蠑螈堀等がそれであります。二代利長の時、城を大分離れて内堀が掘られ、三代利常の時、その外側に外堀が造られたので、城は三重の堀を以てめぐらされ、敵を防ぐ備が十分に出來ました。

城の本丸には、空高く天守閣がそびえ、二の丸、三の丸には、白壁造のりつぱなやぐらや、家臣のやしきがずつとたち並んで、城としての構が見事にとゝのひました。



金澤城

しかし、この城には、大切な水が足りませんでした。火事の時など水がたらないものだから人々はたゞ「あれよあれよ」とさわいでゐるうちに、火の勢は見る〳〵強くなり、本丸までもすつかり燒いてしまつたこともありました。利常はこれをいたく心配して居たのですが、その頃小松に、板屋兵四郎といつて、測量や算數に大そうすぐれた人が居ると聞き、早速召出して、用水を引くことを命じました。兵四郎



河北門

は實地についてくはしくしらべ、つひに遠く犀川の上流から十粁ばかりの間、山や谷や岩壁をつらぬく水路を作つて、水を城内へみちびく事に成功しました。これが今でも殘つてゐる辰巳用水で、其の大規模であることと、上手につくつてあるのに驚かないものはありません。

かうして城は非常によくなり、その防備が十分に出來て、百萬石の城としてふさはしいものになりました。

城が、このまゝでずつと殘つて居ればよかつたのですが、不幸にもその後、何度も火事にあつて、すつかり燒けてしまひました。今、國寶になつてゐる石川門は、僅かにそのおもかげを殘すにすぎません。

四　城下の發展

利家が金澤城主となつた時には、金澤は尾山八町といふのが城のまはりにならんでゐただけでした。いよ〳〵金澤へはいる時に、尾張・越前・能登から、多くの人々がついて來たのですが、その中、尾張から來た人たちの住まつた所を尾張町と名づけ、それについで、城寄りの所に今町・新町などの町が出來ました。文祿元年、金澤城の石垣を作つた時、城内にあつた堤町・南町を城の外に出して今の所に移しました。これで金澤は大分廣くなりましたが、それでも今の金澤に比べると、まことに小さくそして淋しいものでした。

慶長四年、利家のなくなつた時には、二代利長は富山にゐたのですが、急いで金澤に移り住みました。その時、富山に居た多くの家臣もまた金澤に來たので、城下は大いに繁昌し、町もりつぱになりました。その後利長は、三代利常にあとをゆづり、高岡に隱居しましたが、慶長十九年に世を去つた後は、その家臣が全部金澤に歸つたので、町はます〳〵發展し、廣さもずつとふえました。高岡町はこの時に出來たといはれ、にぎはひも一しほ增しました。

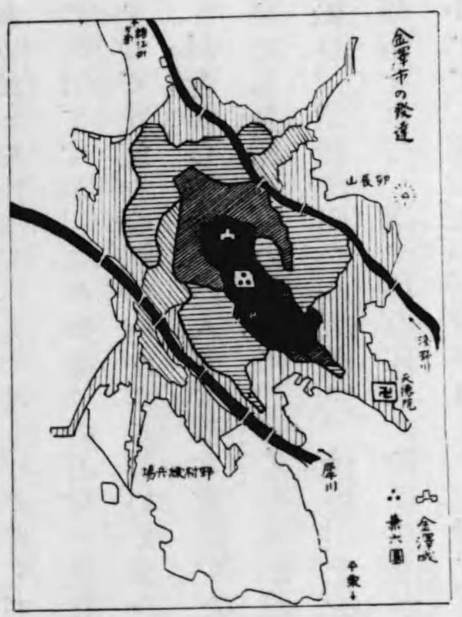
金澤の町を流れてゐる犀川は、もと二すぢに分れてゐて、一つは現在流れてゐる所、今一つは香林坊のあたりを流れてゐました。それが利常

の時に一つに合はされたので、もと河原であつた所に、片町・古寺町・五枚町・竪町等が出來て大いに繁昌し、川岸が埋められて上川除町・中川除町・下川除町等が出來ました。かうして町が廣くなると同時に、町の整理が行はれました。淺野川方面に散在してゐた寺を卯辰山の麓に集め、犀川の近くにあつた寺を、皆寺町に移し、利家の墓所野田山に行く間には、寺町のまつすぐな道が作られて、並木の松がその端に續く道の兩側に植ゑられました。

小立野の奥には天德院が建てられました。これは、利常の夫人の菩提をとむらふ爲に創立されたもので、大乘寺・寶圓寺とともに、禪宗の三大伽藍となりました。

寺町と小立野がりつぱになる一方、金澤と宮腰（今の金石）との間にも、まつすぐな道が作られ、城下と海港との連絡が大そう便利になりました。この道を作るには、夜中數箇所にかゞり火をたいて、城の上から見通しをつけ、道が少しも曲らないやうに注意したといはれてゐます。利常は、城内玉泉院丸の地を平かにして草花を植ゑ、りつぱな花園を造つたのですが、この時多くの石材を能登から舟で宮腰に陸上げし、このまつすぐな道を金澤へ向かつて引いて來たのでした。

田舍から城下へ出入りする人數は、だん〳〵多くなつて、その道筋にあたる金澤の町の入口に、多くの家が建てられました。越前に向かふ有松口、能登に向かふ大樋口、淺野川上流に向かふ小立野口、及び田井口等がそれで、車や馬の往來に砂ほこりが上り、休茶屋ののれんが風にふかれて、都らしい活氣が日に〳〵增すばかりでした。



それにつれて町の中の商業も盛になり、米市場・魚市場・青物市場などが出來てなかなかにぎはふやうになりました。

魚市場は、利常の頃から盛となつたもので、初めは淺野川方面の袋町、犀川方面では竪町の入口の魚屋町にあつたのですが、元祿三年頃、共に近江町に移りました。これが

ずつと續いて今でも繁昌してゐるのです。

かうして家が次第にふえ、町のにぎはひは日に〳〵加はりました。ずつと後世のことですが、久しく他國へ行つてゐた俳人梅室が、金澤に歸り、卯辰山から町を見下すと、そのにぎやかさが、前の數倍でありましたので

屋の棟にそうて殖えけり梅柳

とうたつたといひますから、その頃でも尙發展の勢が止まなかつたものと見えます。

五　美術工藝盛となる

第三代利常はまた、名工を招いて美術工藝の進歩に努めました。もと、

豐臣氏に仕へたりつぱな工人が、京都や伏見に居ましたから、それ等を多く招きよせました。これがもとになつて、やがて五代綱紀の代に百花一時に咲亂れるやうにすばらしく盛になりました。

綱紀の代は、貞享、元祿の頃で、天下一般に太平を樂しみ、美術工藝を好む風があつた上に、侯は七十九年間、藩主としての生涯を通じて、その發展をはかり、また大身の家臣たちもこれにならつて、その保護奬勵に心を用ひましたので、江戸・京・大阪についで、工藝の金澤として有名になりました。

先づ、金や銀、其の他いろ〳〵の金屬を用ひて美しい細工をすることが、盛となりました。その細工も、はじめは刀・よろひ・かぶと・馬の鞍などの飾をつくるのが主な仕事でしたが、後には、床の置物、女の髮飾などを多く作るやうになりました。利家に仕へた後藤琢乘は、最も早く名を知られた人で、京都から招かれて來て、七尾や金澤に住み、美しい金屬の飾物を作りました。利常の時に後藤覺乘、綱紀の時に覺乘の子演乘が招かれて來て、よい金屬器を作りましたが、その後に來た程乘が最も有名で、綱紀に大そう重く用ひられました。程乘は金屬器を作ると同時に、石材にも上手にほりものをしました。今の兼六園内の夕顏亭にある手水鉢、及び尾山神社にある六地藏の手水鉢はいづれもその作だといはれます。

程乘の弟子からは、加賀象眼を作る職人が多く出ました。象眼とは、金・銀・銅・鐵の地に、ほそい他種の金屬をうちこんで、畫を作り上げるものをいふのです。今も金澤に美しい象眼を產しますが、そのもとはこゝ

に始るのです。いろ〳〵の金工の住んでゐた町が、白銀町・象眼町と名づけられました。

蒔繪もまた利常の頃から盛になりました。これは、塗物に金銀で美しい繪や字をかくことをいふのです。寛永年間に、五十嵐道甫が金澤に來てから、それが一きは巧になりました。道甫は京都の人で、蒔繪の天才としてその名を知られてゐました。次いで、二代道甫が來て金澤の松原町に開業するやうになつてから〳〵盛になり、その弟子も多く、つひに蒔繪が金澤の名產と稱せられるやうになりました。

寛文六年(綱紀の時代)から大樋燒もつくられました。これは大樋町に窯があつたもので、九谷燒のやうな美しさはないが、何となく上品でよい感じがするので、茶の湯の用器等として珍重せられました。

その他、染物や、刀をつくることなども盛になり、又りつぱな建物も建てられました。今國寶になつてゐる尾崎神社は、四代光高の時に建てられたもので、當時のすぐれた建築の樣子を知ることが出來ます。

江戸又は京都にゐて藩の用をつとめ、或は招かれて金澤に來り、直接間接に金澤の美術・工藝の發達につくした人もずゐぶんありました。狩野探幽は繪をもつて天下に名をとゞろかした人ですが、江戸で綱紀の賴みにより、楠公父子が櫻井の驛で別れをつげてゐる繪をかきました。當時日本第一といはれた畫かきに、この繪をかゝせたといふことは、綱紀の心の程がしのばれる、まことにゆかしい話ではありませんか。探幽の弟子久隅守景は、金澤に居ること六年、そのすぐれた腕を十分にふるつて、これまたりつぱな繪をかき殘しました。

尙、後には九谷燒が金澤に產するやうになりました。加賀の九谷燒は江沼郡九谷の地で燒きはじめたものがもとですが、元祿の頃になると、すつかりすたれてしまひました。綱紀の頃、大樋燒が世に出たことをさきに申しましたが、これは一般向でないので陶器は多く肥前の唐津から買入れました。今でも陶器の事を「からつもの」といふのはこの爲であります。後には尾張國からも買入れるやうになり、百年ばかりの間、陶器はかうして他の地方からどし〳〵はいつてきました。これではならんといふので、文化四年、十二代齊廣の時に、京都の名陶工靑木木米を招き、春日山の麓に窯を築いて陶器を造らせましたところ、さすがは世に知られた名工の作だけに、實にすばらしいものが、數多く出來ました。木米は間もなく京都へ去りましたが、その弟子があとをうけて仕事を續け、これを春日山燒といひました。その後春日山燒は衰へ、武田民山といふ人が、やはり春日山で陶器を造り、民山窯ととなへて世に出しました。これらの名工の作風が、つひに金澤の九谷燒のもととなり、全國に名を知られる特產物となつたのであります。

六　榮える學問

金澤ではまた學問が大そう盛になつて來ました。これは前田家代々の藩主が皆學問を好み、自ら學ぶと共に、家臣にもこれをすゝめた爲でありました。

利家は、さきにものべたやうに、天下一の槍といはれた程の人でありましたが、また一面學問にも心を用ひ、「論語」「中庸」といふやうな書

物をよく讀み、これをすつかりおぼえてゐられました。

利長は、明の學者王伯子を金澤に招いて、その講義を聞き、一方藩士にも學問を教へさせました。三百に餘る大名の中で、外國の學者を招いたのは、これが最初でありました。王伯子は、今の公園の地に屋敷をたまはつて住んでゐましたが、大そう人々に敬はれてゐました。

利常、光高、綱紀と相次いで藩主となつた方は、何れも學問を好み、和漢のよい本を買集め、その數が何萬册とも知れない程になりました。江戸の有名な學者が、

「加賀は天下の書府である。」

といつて感心したといひます。書府といふのは書物庫といふ意味です。

中でも綱紀は、書物を買集めた數が最も多く、學問にも一段とすぐれてゐました。元祿五年から、將軍綱吉の前で、たび〳〵論語や大學の講義をして、大いに名聲を上げました。

學者として有名な人も、多く加賀藩に仕へました。木下順庵は、その頃天下にきこえた大學者でしたが、綱紀に招かれて、十九年も祿を受けてゐました。從つてその弟子も澤山ゐましたが、中でも室鳩巣は最も有名でありました。鳩巣は、十四歳の時、初めて綱紀に仕へましたが、やがてその命によつて京都に行き、順庵の弟子となつて學問にはげみ、元祿十年、四十歳の時から金澤の長町に住み、藩士を教へること十五年間、その學問の深いこと、詩や文章の上手なこと、人格の高いことなどで、大そう人々に敬はれました。鳩巣は、後に幕府に召出され、學問を教へる一方、政治の相談にもあづかつて、大いに功績をあらはしました。

明倫堂・經武館

博物學者として知られた稲若水（稲生宣義）も綱紀に仕へ、庶物類纂といふ、植物のことを書いた書物を三百六十二卷あらはし、この道では當代第一と稱せられました。

十一代治脩の代には、學者として有名な新井白蛾を京都から招き、今の公園の所に、藩の學校明倫堂を建ててその學頭とし、大いに學問を勵ましめました。それと並んで武術の練習をする經武館も建てられました。學校が出來上つたのは寛政四年の二月で、士民のそこへ入學を願ひ出たものが二千六百人にも上

りました。三月二日、盛大に開校式があげられましたが、この日、學頭新井白蛾は孝經の講義をなし、多くの學生がこれをきゝました。此處には、身分の高い者も低い者もはいつて、一心に學問武術を勵みました。

學校の教師にも、身分にかゝはらず、すぐれた人をあげ用ひたのでした。澁谷潛藏・中島半助・林慶助等は、陪臣からあげられて明倫堂の教師となりました。また、經武館の師範になつた人にも、陪臣があり、與力があり、足輕もありました。從つて、學校の中は非常に活氣があり、すぐれた人物も多く出ました。

町のあちらこちらには、もとから寺子屋がありましたから、一般の少年はそこへはいつて讀方・書方・算術などを習ひました。生徒には、武士の子も、町人の子もまじつてゐましたが、入學する時がきまつてゐませんで

から、七八つの子供も、十六七の少年も、共にならんで同じ本を讀み、同じ字を習つてゐました。毎年、春と秋には習字の展覽會をして、級を進められるのでした。

このやうに、だん〳〵學問が行はれるやうになりますと、和歌や俳句にもすぐれた人が多く出ました。

和歌は、利常の頃からかなり行はれてゐましたが、藩政の終頃に、田中躬之が國學・歌學を教へてから、次第に盛となりました。その弟子には狩谷竹鞆(鷹友)が最もすぐれてゐました。

俳句は、元祿年中、江戸から松尾芭蕉が來て以來、急に盛になりました。「あか〳〵と日はつれなくも秋の風。」とよんだ句は、石にほられて兼六園内にありますが、これは、犀川あたりで、西に沈む夕日を見ながらうたつたものだともいはれてゐます。その弟子から、名高い人が多く出ましたが、中でも、北枝、牧童、句空、秋の坊等は、天下にその名を知られた人達です。後には、希因、麥水が名をあげ、つゞいて闌更、蒼虬、梅室等がつぎ〳〵と出て、日本全國に其の名をひゞかせたのでした。

十一代治脩についで、齊廣が十二代の藩主になりました。この頃、永らく太平がつゞいたおかげで、人々は安らかな生活になれ、大そうぜいたくをするやうになりました。齊廣は、どうかしてこれをなほさうと思ひ、かたく藩士のおごりを戒めると同時に、學問と武藝をはげましました。

富田景周といふ有名な學者があらはれたのはこの頃であります。景周は、二千五百石をいたゞいてゐた武士ですが、非常におぼえが強く、い

たつて學問が好きでありました。殊に國史にくはしく、詩や文章にもすぐれてゐました。數十年の間、非常な努力をつづけ、加賀藩の地理・歴史を調べ、つひに不朽の名著越登賀三州志をあらはし、又燕臺風雅その他數多くの書物をあらはしました。越登賀三州志は、神代からその頃までの移り變りを書きあらはしたもの、燕臺風雅は、漢詩・漢文のことを書いたものですが、共に加賀藩始つて以來の大著述で、加賀・能登・越中の、歴史と地理と文學とを知ることが出來るのは實にこのおかげであります。

七　世に名高い兼六園

文化五年の正月、不幸にも金澤城は火災にあひ、建物は大方燒けてしまひました。齊廣は、急いで江戸から歸り、すぐに城の建直しを始めました。工事が始ると、城下の人たちは、或は仕事の手傳をし、或は木材を献じ、また、金銀をさし出したりしたので、翌年の四月には、前よりもりつぱに出來上りました。その頃の人は、こんなにりつぱな御殿が、どうしてかうも早く出來たのかと驚きました。

この時、金箔がたくさん入用だつたので、金澤の町のあちらこちらで箔をつくる工場がいくつも出來ました。金澤の箔製造は、この時からぐつと盛になつて現在に及んでをります。

御殿が出來上ると、齊廣は、金澤生まれの繪の大家岸駒を、京都から招いて、ふすまなどに繪をかゝせました。岸駒は、故郷の殿樣に迎へられたことを喜び、十分に腕をふるつたので、人目をうばふ見事な繪が、

部屋毎にかゝれて、御殿のりつぱさを一そう引立たせました。

齊廣は、その後、明倫堂・經武館を、今の廣坂通に移し、そのあとを自分の隱居所として、竹澤御殿といふりつぱな建物を造り、そこに移り住みました。その建物が壯麗であるばかりでなく、庭園のりつぱなことは、見る者の目を驚かすばかりでした。枝ぶりの面白い老松・古木が植ゑられ、珍しい石や、風がはりな燈籠が手ぎはよく置かれ、流水はめぐりめぐつて池となり、瀧と落ち、その上にかけられた雁行橋（龜甲橋）、黄門橋など、人目にこの上なく喜ばれるやうに出來て、庭全体のおもむきのあることは、筆にも言葉にもあらはすことが出來ませんでした。

齊廣は非常に喜び、白河侯松平定信にたのんで、庭の名を選んでもらひました。定信は、この庭が六つの勝れたものを兼ねそなへてゐるといふので、「兼六園」と名付け、見事な文字を書いて、齊廣に贈りました。齊廣は、それを大きな槻の板にほり、庭園の入口の門にかけて置きました。この額は、今、園内の商品館に保存してあります。

六つの勝れたものとは、宏大（全体のしくみがひろ〳〵と大きい）、幽邃（木がよく生ひ茂り奥床しい）、人力（人手をよくつかつてある）、蒼古（古めかしい）、水泉（清らかな水の流がある）、眺望（遠方のながめがよい）をいひ、兼六とは、宏大であると幽邃さがうすらぎ、人力をかけると蒼古さがなくなり、水泉を取入れると眺望がきかなくなり易いのに、この兼ねがたい六つを、よく兼ね備へたものだといふ意味であります。

齊廣はまた、竹澤御殿のかたはらに大きな釣鐘をかけ、きまつた時刻にこれをつかせて、時を知らせました。今、石川門のそばにあるかねはその時つかつたものです。

齊廣は、隱居してから竹澤御殿に住み、殿內に教諭局を設け、すぐれた人物を局員として、大いにその子齊泰の政治を助けようとしたのですが、惜しいことに、間もなく病氣で世を去りました。

八　西洋風の學問と兵備

齊廣の次の、十三代齊泰の時代は、約四十五年間にわたり、いろ〳〵の事件が多く、加賀藩としても、又、日本國としても、多難な時でありました。

齊泰はまづ、明倫堂及び經武館の規則を改め、藩士の子弟が十五歳になると必ず入學させ、在學九年にならねば決してやめてはならぬと定めました。これが爲に、藩の學問・武藝はめざましいくらゐ盛になりました。尊王愛國の精神にもえた國學者田中躬之が出で、藩士を教へたのも、實にこの頃でありました。又、天保九年、近藤忠之丞が、父の仇山本孫三郎を討取り、孝子の名をあげたのもやはり齊泰の時でありました。

この頃から、外國の船がしきりに日本の近海にあらはれ、或は海を測量したり、或は亂暴なふるまひをしたりしました。加賀藩でも、海岸の防備を嚴重にし、安政元年には、西洋陣法を習得するために、金澤の柿木畠で壯猶館を開きました。これはもと、西洋流火術方役所といつた

のですが、壯猶館となつてからさらにこれをひろめ、砲術ばかりでなく、航海・測量・馬術・西洋醫學等までも研究し、尙、火藥・兵器の製造もやり、又、買入れの紹介もしました。黑川良安・安達幸之助は、當時の西洋學者として有名な人でありましたが、この壯猶館の教師にあげられ、熱心に教へました。

壯猶館の生徒は、三百人以上もあつて、館の內外にあつた練兵場で、西洋風の號令のかけ方、西洋風の馬術、砲術などにはげみました。その演習の樣子がめづらしいので、いつも見物人がたえませんでした。

壯猶館に附屬して英學所が設けられ、そこで英語が教へられましたが、これが次第に盛になり、その分校が七尾に設けられました。そして米國人オースボンを教師として招き、英語を教へさせました。これを七尾學所といひ、金澤から優等生三十餘名を送つて、その教を受けさせました。後の海軍大將爪生外吉、理學博士藥學博士高峰讓吉等は、その時の生徒でありました。

後に、七尾學所も金澤に移り、西町の神護寺を校舍にあて、名を致遠館と改めました。之が後に中學校となつたのです。この外、尙、いくつもの西洋學問所が出來て年々盛になりました。

九　勤王の人々と藩末の改革

加賀藩では、西洋の學問を盛にすると共に、ます〳〵軍備を十分にすることに心を用ひました。藩主齊泰自らも、金澤の近くにある鈴見村の銃砲製造所、土淸水村の焰硝庫を巡視し、士氣をふるひ起すことにつと

めました。

安政二年四月、怪しい外國の船が、江沼郡の沖合にあらはれ、宮腰の海岸をへて、北方に姿をけしました。藩士の中には、外國人を日本の國へよせてはならぬ。もし、外國人が無理にやつて來たならば、うちはらつてしまへととなへる者もあり、又、日本はこれから外國と仲よくし、外國のよい所をまねて、開けた世の中にしなければならぬといふ者もあり、この二つの議論が、一時ずゐぶん盛にたゝかはされました。

加賀藩では、これまで、多くの武士が平和になれて、安らかな生活を送つてゐたので、世に出て大いに働く氣力がうすくなり、又、この土地からはなれて他地方へ行くといふこともほとんど無かつたので、天下の樣子を知つてゐる人も餘り居ませんでした。しかし、藩政の終頃には、ほんの少數であるが、勤王の志士があらはれました。この人たちは、よく天下の事情をわきまへて、天皇の御爲、日本國の爲に、命を捨てても、かたい決心をもつて活動したのであります。

藩主齊泰の子慶寧は、勤王の志の厚い人でありました。慶寧に仕へてゐた松平大貳・不破富太郎・千秋順之助・青木新三郎・大野木仲三郎等の人々は、これを助けて、長州藩士桂小五郎等と謀を通じ、正義を唱へて、朝廷の爲に、大いに働かうとしました。その間に、小川幸三・福岡惣助等も、京都へ行つて公卿や諸藩の志士と交はり、天下の形勢をさぐることにつとめました。

元治元年、慶寧は、兵をひきゐて京都に上り、御所を守ることになりました。慶寧は、病氣にかゝつてゐましたが、つとめて守護の役目をは

たして居ました。

その時、長州藩士が兵を率ゐて京都へ上つて來ました。長州藩は、さきにむじつの罪によつて罰せられてゐたので、どうかして許していただきたいものと、いろ〳〵お願ひしたが、許されません。そこで、武力によつてその目的をとげようとして、上つて來たのであります。長州藩は使を加賀藩へよこして、

「我が藩は、今、兵を率ゐて京都へ攻めてはいるが、決して朝廷に手向かひするつもりはない。我が藩のむじつの罪をうつたへ、會津・桑名などの藩の勢力を京都から追拂ひ、そのあとで、諸藩と共に、　天皇を戴いてよい政治をして行かうと思ふ。今、戰が始ると、　天皇のみこしは加賀藩の領地へ御移しすることになるだらう。あなたの藩は、どうかさきに軍を退けて、　天皇のみこしがお出でになつたら守つていたゞきたい。又、もし戰が我が軍に不利であつたら、援の兵を送つてもらひたい。」

と賴んで來ました。其の頃近江に加賀藩の領地があつたのです。

不破富太郎・大野木仲三郎等は、前から長州藩の勤王をよく知つてゐましたから、これに賛成し、慶寧にも申し上げて許を得、その準備をしてゐましたが、加賀藩士の中には、これに反對する者もあつて、京都を出るのが大變おくれました。やうやくのことに大津まで來ましたが、その時はもう、長州藩士が敗れて、退却してゐるときなのでした。

この爲に、加賀藩勤王の志士の考は、すつかりくひちがつてしまひました。幕府の威勢におそれてゐた藩士の多數は、急に勤王の人たちをお

さへることにしました。松平大貳は責任を負うて自殺し、不破富太郎・千秋順之助・大野木仲三郎・青木新三郎・福岡惣助・小川幸三等は、いづれも死刑になり、他の者は、或は牢に入れられ、或は流されなどしました。これ等の有爲な人物をなくしたことは、加賀藩の大きな損失であり、まことに惜しいことでありました。しかし、明治の御代になつて、朝廷からその功をみとめられて、それ〴〵位を贈られ、さらに昭和の御代には、兼六園内に慶寧の銅像が建てられ、その臺石に勤王志士の名が、りつぱにかゝれたのでした。

慶應二年、慶寧は齊泰のあとをついで十四代の藩主になりました。慶寧は天下の有様をながめて、昔のまゝの政治では、とても新しい時代に合はないと考へ、思ひきつた改革をしました。

先づ、武士の服は、これまでの着物・袴では不便であるといふので、簡單で便利な、今の洋服に近いものに改め、軍制も、すつかり西洋風にし、尙、軍艦を買入れたりして、軍備に多く力を入れました。

又、卯辰山を切開いて、いろ〳〵の施設を加へ、人々の爲をはかりました。この開拓は、藩政時代最後の大土木事業でありました。先づ、山の上を平かにして、養生所を建てました。これが、加賀における病院の始でありましたから、病氣になつた人は、ぞく〳〵と治療を受けました。まづしい病人には、無料でみてやり、藥もたゞで渡しましたので、人々は涙を流して喜びました。やがて、病氣や藥のことを研究する醫學館と、藥草を作る藥園とが出來上りました。又、笠舞村にあつた非人小

屋を、名も撫育所と改めて卯辰山の谷間に移しました。非人小屋は、綱紀の時に出來た貧民の收容所でした。

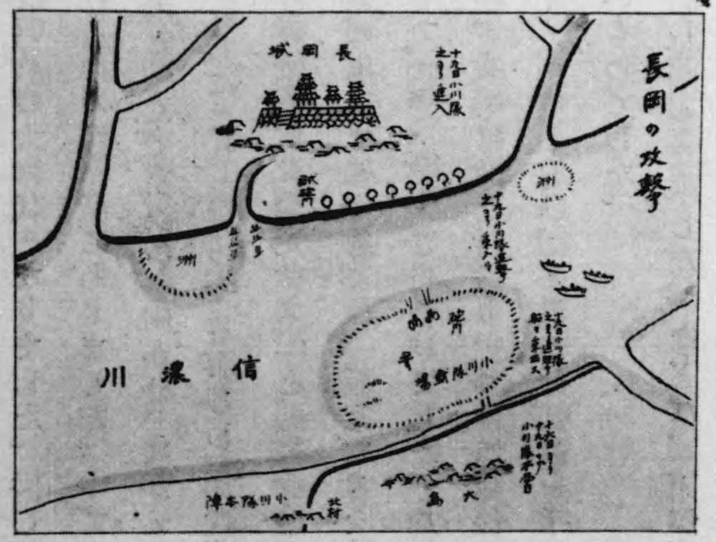
山の頂近くには菅公の社が建ち、麓には、陶器・漆器・綿布・紙等の工場も出來、劇場・茶店などもたち並びました。山の上り口には、歸厚坂・千杵坂・子來坂などが出來て、人々の往來が自由になりました。これ等の仕事は、慶寧が、町の幸福を思ふ心から起したのですから、人人は皆、喜び進んでその仕事を手傳ひ、毎日々々大勢の人が出て働きましたので、意外に仕事がはかどりました。その働いた總人數は五萬人にものぼつたと申します。

十　越後の戰と招魂社

やがて、德川幕府は倒れて、世は明治の大御代となりました。併し幕府方では、朝命にそむいて兵をあげるものが諸所にありました。中でも會津の松平容保は、奥羽・越後の諸藩と結んで官軍に手向かひ、なか〳〵勢が盛でありました。朝廷では、たゞちにこれを討伐する事とし、加賀藩に對して、「薩摩・長門の兵と共に、越後方面を平定せよ。」との御命令がありました。かねてから勤王の精神にもえてゐた慶寧は、謹んで命を奉じ、すぐに七千餘人の軍兵をとゝのへ、越後國へ さしむけました。加賀軍は、薩長の兵と力を合はせて進み、次第に敵を討破り、つひに越後の柏崎を占領しました。それからゆく〳〵敵を追ひ、多數の分捕品を手に入れましたが、どの戰も實に苦しいものでした。

信濃川の沙洲に居て、その對岸の長岡を攻擊した時 などは、雨がざ

あざあと物すごい勢で降りそそぎ、信濃川の水はあふれて砲壘にまで達し、兵士の服は全部びつしよりぬれてしまひました。敵からはしきりに砲彈が飛んで來ます。水かさはます〳〵ふえ、砲車の半ばは水中に沈みました。けれども一歩も退かず、沙洲の中に四日もふみこたへ、死物狂ひで砲彈をあびせましたので、砲身はやけて、手をふれることが出來ない程になり



長岡の攻撃（越後戰爭）

ました。さすがの敵も、この加賀軍のねばり強さにはまゐつて、つひに退却しましたので、やうやく長岡を占領することが出來ました。

また或時は、小さい川をへだてて、敵と相對しました。兩軍の打つ彈丸は雨あられと降りそゝぎ、ときの聲は山にこだまして、地もふるふばかりでした。夕日が沈んでもなか〳〵勝敗が決せず、一晩中、敵の銃口から發する火花を目あてに射擊を續けました。夜明け方になつて、敵の勢が少しひるむ所を、一せいに突擊して、やう〳〵勝利は味方のものになりました。

この樣に、はげしい戰をして敵を討破り、つひに會津まで追擊したのです。加賀藩諸隊の中で、小川仙之助のひきゐる一隊は、殊に目ざましい働をしたので、その隊は小川壯健隊と呼ばれ、勇名は天下にとゞろき

ました。

加賀軍がこんなめざましい働をした一方、藩主慶寧(よしやす)は多額の軍用金を朝廷にたてまつり、又兵糧武器などをどん〳〵戰地へ送りました。藩の持つて居た汽船二そうも軍用船として差出しました。こんな風に、戰役の間加賀藩のつくした力ははかることが出來ない位でした。

戰終つて、加賀軍は、堂々と金澤に凱旋し、朝廷からは加賀藩に厚く賞を下されました。

この戰で、加賀軍將兵の戰死したものが百名餘りありました。慶寧(よしやす)は、加賀藩の武威をかゞやかしたこれ等忠勇の士のために、明治三年、卯辰山の頂上近くに社を建ててその靈をおまつりしました。

三　明治以後の金澤

一　衰へかけた金澤

士族と町人

各地の戰亂もをさまり、明治の大御代は開けてゆきました。七百年の長い間を、我が物顔にふるまつてゐた武家の天下が、根元からくつがへされて、天皇御親政の日本、卽ち正しい姿の日本にかへつたのでありました。いろ〳〵の事が新しく改められて、世の中がこれまでとはすつかり變つてしまひました。

明治二年、加賀藩主前田慶寧(よしやす)は、その領有してゐた土地・人民を朝廷

にお返しして、新に金澤藩知事に任ぜられました。日本中の殿様が、かうして皆、その藩の知事に任ぜられたのですが、名前はどうかはつても、昔からの様式は、なか〳〵ぬけきるものではありません。その爲に新しい政治が行はれにくいと見てとつた政府は、明治四年、全國の藩を廢して縣を置き、新に役人を任命して政治を行はせることにし、もとの藩知事たちを、全部東京に移り住まはせることにしました。

この年七月、三百年來の土地・人民に別れを告げて、前田家が金澤を去りました。前田家は、利家以來久しく藩主として、よい政治を行ひ、士民をかはいがり、此の地の發展を致して來ましたので、人々は、心から別れを惜しみ、東京に移つた後も、尙、敬ひしたつて居ました。殊に藩祖利家を崇拜する心が厚く、明治六年、尾山神社が建てられる時には、大いに喜び、各町の名をつけた旗をひるがへして、犀川・淺野川から土や石を運んで、その基礎工事を助けました。下つて八年、三層樓の神門が出來上り、人々はこぞつておまゐりして、金澤と前田家の關係が、又新に結ばれた事を喜んだのであります。

話をもとへかへして、明治二年九月には、内田政風が金澤縣の大參事として着任し、縣廳を長町の舊藩廳（今の專賣局のあるあたり）に置いて、新しい政治を始めました。かうして、金澤は、維新後もこの地方の政治の中心となり、藩政時代に引續いて榮え行くはずでありましたのに、其の後一時めつきり衰へることになつたのは何故でせうか。

前田家が、金澤の地を後にして東京に移り住まはれると、一番困つた

のは士族で、今後の生活を營む方法について惑はねばなりませんでした。當時政府の方からは、これ等の職もなく、商賣も知らぬ士族を救ふために、いくらかづつの公債を發行しましたが、それはごく僅かなものでした。その上、士族はこれまでの華美な生活になれてゐた爲に、今、主家に離れ、知行を失つても、急にその生活ぶりをかへるわけにはまゐりません。ぐづ〳〵してゐる中に、いよ〳〵衣食に苦しむやうになつてきました。中には、商賣を始めた人もありましたが、なれない仕事に成功するはずもなく、士族の生活は、日に〳〵苦しくなる一方でありました。

もと〳〵金澤は、城が中心になつて發達した町です。士族が居る所へ町人が集つて來て出來た町です。その爲に、金澤の士族と町人は、車の兩方の輪のやうに、もちつもたれつ、互に助け合つて金澤の發展を致して來たのに、今や、その一方の士族は、その日の暮しにも困るやうになつたのですから、その影響が町人にも及ばないわけはありません。そして、その事は、やがて金澤の衰へとなつてあらはれて來たのでした。

縣廳の移轉

ところがその後、縣廳を、その頃まで本吉村といつてゐた石川郡の美川町へ移すことになりました。石川縣の名は、この時つけたもので、石川郡の石川をとつたものです。しかし何といつても、美川は縣廳を置く所として不便でありましたので、その後、七尾縣といつてゐた能登が、

石川縣に合併されると共に、縣廳は再び金澤に移つて、廣坂通にあつた營修局といふ建物を廳舍としました。

美川町へ縣廳が移つてゐたのは、僅かに一年足らずでありましたが、その間に、いよ〳〵生活が苦しくなつた士族は、或は郡部へ、或は他縣へと移つてしまつて、金澤のさびれ方は一そうひどくなりました。本町通であつた野町・片町・石浦町・尾張町などでさへ、軒並に空家が出來、裏町通に至つては、殆ど想像もつかないくらゐのさびしさで、町のまん中に田圃が出來（横山町）、竹藪が出來（櫻木町）、りんご畠（三社）が出來るといふ有樣でした。

この衰へを目のあたり見て、金澤のおもだつた人だちは、百萬石の榮えた昔にかへさうとしていろ〳〵苦心し、勸業博物館などをおこしましたが、當時は何のきゝめもありませんでした。

しかし、金澤は何時までも衰への一路をたどつたでせうか。

二　回復への努力

金澤營所のはじめ

みだれ飛ぶ　たまに破れて
戰のてがらをかたる　ほまれの軍旗、ほまれの軍旗。
おごそかな　ラッパのひゞき、
目の前を今過ぎて行く　尊い軍旗。　拜せよ、軍旗。

この詩を口ずさむ時、紫色のふさだけとなつて、幾多の軍功を語る我が歩兵第七聯隊の軍旗を思はずには居られません。勇ましい第七聯隊の

軍旗。それは聯隊の名譽だけではありません。我が金澤の大きい誇なのであります。

明治五年に陸軍省が置かれ、全國を六鎭臺とし、金澤には、名古屋鎭臺に屬する營所を置くことになりました。六年一月、歩兵第二十一大隊が出來(歩兵第七聯隊の起り)、舊の金澤城を兵營とすることになりました。舊の金澤城といつても昔のまゝではなく、前田家が引拂はれてから、不要の建物がすつかり取りこはされてゐたのです。次いで八年四月、聯隊長津田正芳少佐がきてから、聯隊本部を金澤城内二の丸に置き、九月九日、目出度い重陽の節句の日に、明治天皇から、おごそかに聯隊旗が下されたのでした。

十四年一月、城内から火を失し、殘つてゐた建物が大方やけてしまつて、今私共の目にふれる石川門とやぐらを殘すだけとなつたことは、かへすがへすも惜しいことでした。しかしながら、この頃から次第に大手町に商家が立並ぶことになりました。藩治時代、武士の屋敷町として知られてゐた大手町一帶も、維新以後一時衰へたのですが、第七聯隊の置かれた爲に復活したといふわけであります。かうした市勢の回復するしるしがぼつ〳〵現れはじめたのです。

第七聯隊は、明治十年の役に、始めて軍旗を九州の地に進めました。この役、金武山の壘を攻めた時の戰は最も激しく、しのつく大雨に火藥がぬれて用をなさず、全軍、銃劍をひらめかして突擊に突擊を重ね、つひに頑强な敵を破り、北陸健兒の名をあげたのでした。兼六園内の日本武尊の銅像は、この西南の役を記念する爲に建てられたもので、銅像の

臺石に、大きく「明治紀念之標」とほられてあります。

降つて二十七年八月二十九日、聯隊長三好成行大佐以下が、「天皇陛下の命により外征の途に上り、名譽ある軍旗と運命を共にする。」との悲壯な覺悟を示しながら、金澤の人たちの萬歳の渦と、興奮のるつぼの中を、征清の途に上り、各地に轉戰して勇名をはせました。かうして第七聯隊と金澤との關係が、ます〳〵かたく結ばれました。

寺町と特科隊

日清戰爭が終つてから、政府は一段と軍備の充實をはかり、師團を增設することにし、我が金澤には第九師團を新設することにしました。その爲、第九師團司令部と、歩兵第三十五聯隊（現在は富山へ移轉）・騎兵第九聯隊・野戰砲兵第九聯隊（現在は山砲）・工兵第九大隊・輜重兵第九大隊とを新に金澤に置くことになりました。師團司令部は金澤城内に置き、他は全部郊外野村の地に置かれました。特科隊といふのは、この騎兵・砲兵・工兵・輜重兵の各隊をいふのです。寺町一帶が其のおかげを受けて、家も建ちならび、にぎやかさも增して來ました。

その後、明治三十七八年の戰役には、第九師團は乃木將軍の下にあつて旅順を包圍し、盤龍山の攻擊にあたつては、第七聯隊の如き、殆ど全滅の悲運に會ひながら屈せず、姫野工兵曹長が、爆彈をかゝへて敵陣にとびこむ等の壯烈な肉彈戰を演じて、勇名を世界にとゞろかせた事は、人のよく知るところであります。

教育都市として

兵營が金澤に置かれると共に、各種の學校がどし〳〵建てられて、多くの學生が集るやうになり、教育都市としての金澤の名をあげることになりました。

その昔、「加賀は天下の書府なり。」といはれたにそむかず、藩政時代は學問が非常に盛に行はれましたが、その餘勢を受けて、明治年間の金澤の教育は、他都市に比べて、かなりすぐれてゐました。明治の始に關口開（せきぐちひらき）といふ數學の大家があらはれて、多くの生徒を教へ、その著（あらは）した數學書の中で「新選數學」が、日本全國に用ひられて、二十萬冊も賣れた事などは、金澤の一つの誇（ほこり）であります。

現在、官立の學校は、金澤醫科大學・第四高等學校・金澤高等工業學校の三校あります。

金澤醫科大學は、明治三年に金澤藩が開いた醫學館からずつと系統をひいてゐるもので、大正十二年に、それまで金澤醫學專門學校といつてゐたものの昇格（しようかく）したものであります。

第四高等學校は、舊藩主前田家から八萬圓の寄附金などもあり、縣民多數の熱望によつて、明治二十年に第四高等中學校が始められ、二十七年から今の名になつたものであります。

小立野の奥の金澤高等工業學校は、これよりはるかに新しく、大正十年に開校せられました。

この外、師範學校・女子師範學校以下、中學校・實業學校・女學校の數

は、十指に餘りますが、二三校を除くの外は、皆、明治二三十年の頃に開校せられた古い歴史を有するものばかりで、我が金澤市が、教育都市として全國に知られてゐることも、もつともであると思はれます。

鐵道の開通

我が國に始めて鐵道が敷かれたのは明治五年で、東京横濱間でした。いよ〳〵開通するときには、「陸蒸氣が走るさうだ。」と、腰辨當にわらぢがけで見に行つたといはれます。かうして珍しがられてゐた汽車も、十年には大阪京都間に、十三年には京都大津間といふ風に、だん〳〵金澤へも近づいて來るやうになりました。そこで金澤でも、舊藩主前田家を中心として、明治十四年に東北鐵道會社を起し、早く鐵道が敷かれるやうにと努力しましたが、何しろ金澤の地は、地理的に見て、福井方面に柳ケ瀨の天險があり、富山方面には親不知の難所があつて、なか〳〵工事の都合が惡く、その上、舊藩士の中には、これに反對する人たちもあつたので、會社は十數萬圓の測量費を使つただけで、惜しいことに解散してしまひました。その後、十六年に、北陸鐵道會社が新に組織されて、運動にとりかゝりましたが、これも失敗してしまひました。

初代市長　稲垣義方

かうして二度までも失敗しましたが、その後、世の中が進むにつれて、これまでのやうでは交通の不便に堪へられぬといふ聲が、やうやく高くなつて、早く鐵道が敷かれることを心から望むやうになりました。二十

二年には市制が布かれて市會議員が選ばれ、稲垣義方が初代の市長にあげられました。金澤市會も二十四年には、北陸鐵道官設の意見を可決して政府に上申しました。これらの運動が効を奏して、政府は、二十六年から三十三年にわたる七ケ年の繼續事業として、北陸線を敷設することにきめました。二十六年四月、敦賀の方から起工して、ぐん〳〵仕事が進み、三十年九月には福井・小松間を、三十一年四月には小松・金澤間を、同年十一月には、あの長い倶利伽羅のトンネルを越えて金澤・高岡間が開通され、十四年以來の長い間の望がこゝに達せられて、金澤も文化の惠に浴するやうになりました。いよ〳〵開通されますと、これまで一箇月近くもかゝつてはいつてきた大阪・京都方面からの商品が、僅か一二日で到着するやうになつた爲、經濟的に大變化が起り、市内の商業の樣子がにはかに大活氣を呈してまゐりました。

盛になつた産業

軍隊が置かれる、學校が出來る、鐵道が敷かれるなどのことがあつて、金澤の町も面目を改め、大そう活氣をおびて來ました。それに伴うて産業も盛になりました。

藩政時代には代々の加賀藩主が皆力を産業の發達に用ひ、殊に美術・工藝を奬勵しましたから、その製作の盛な事は、當時の江戸・京都・大阪と肩をならべたものでした。それらが、明治維新の大きな移り變りによつて、一時すつかり衰へはしたものの、世の中のだん〳〵落着いて來るにしたがつて、また、力をもりかへし、祖先から傳へられた腕に、新時

代の工夫をこらして再び世にあらはれ、加賀象眼・九谷燒等の名聲は、遠く外國にまで及ぶやうになりました。

又、絹織物業の盛な事も、京都・福井と共に世に名を知られ、年々多額の輸出羽二重を製産する樣になりました。これは新しく起つた産業で、明治九年に、小さな手織機械を三臺京都から買入れたのが、その始りでした。それが、この土地に合つたものか、だん〳〵發達して、市内各所に個人經營の機業場が續々起り、つひに年産額五百萬圓を突破する今日の盛運を來すことになりました。

この外、染物・金銀箔・桐火鉢・漁網用撚糸・漆器・力織機・傘・刺繍品等の製産が盛に行はれ、その中、金銀箔・桐火鉢の如きは、全國有數の特産物となつてゐます。

尙、産額は少いが、マッチの製産が行はれてゐます。はじめ、マッチは、どん〳〵外國から輸入されたものですが、これを、始めて日本で作り出して、かへつて外國へ賣出すやうにしたのは、金澤藩士の清水誠といふ人であります。誠は、明治三年、藩命によつてフランス國へ留學し、その間にひそかにマッチの製法を研究しました。歸つてから東京でマッチ工場を起して盛に製産したので、十三年には、もう外國から買入れないでもよいくらゐになり、その後、各地にマッチ工場が出來て、どしどし外國へ賣出す樣になりました。金澤人によつて、日本のマッチ業が開かれたことは大きな誇でせう。

三　躍進途上の金澤

明るくなつて行く市街

片町通・尾張町通は、ネオンの光が晝をあざむき、石浦町・南町、さては横安江町・竪町など、市内の大通はいふまでもなく、どんな小路へはいつても、電燈の光は不夜城の觀を呈してゐますが、明治十年頃は、つり行燈の光が、ぼんやりと影をおとしてゐたにすぎませんでした。

明治天皇行幸の十一年には、天皇をお迎へ申し上げる爲、南町・石浦町では、長い柱の上にガラスの箱をおき、その中へランプを入れた街燈をつけましたが、その外の町には、まだ一本もありませんでした。その後二十七年に、兼六園と尾山神社にアーク燈が一基づつ立てられ、市民は始めて、電燈の光を見て、その明るいのに目をみはつて驚きました。これ

から、金澤に電氣事業を起さうとする運動が起り、會社が出來て、犀川上流の辰巳に發電所を設け、三十三年には工事がすつかり出來上つて、こゝに、かゞやかしい光を、全市内に見るやうになりました。それでもその頃、電燈の數は、僅かに二千三百燈に過ぎませんでした。その後、市の發展につれて、ぐん〳〵電力の需要が增加するので、手取川上流の福岡・吉野・市原に次々と發電所を增設し、事業も市の直營として、つひに電燈數二十萬、現在のやうな光の町金澤をつくるに至りました。石油の光によつて照明されてゐた時分と思ひ合はせますと、まことに隔世の感があるではありませんか。

人力車から電車へ

明治年間は、人力車と馬車が主な交通機關でありました。馬車は、御者が、馬にむちをあてながら、ラッパをふいて客を呼びつゝ通つたもので、當時は、大へん重寶がられたものでした。ところが、大正四年にはじめて自動車が金澤にあらはれて、驚く程の速さで市内を走り出しますと、人力車も、馬車も、すつかりけおとされてしまひました。驛前には、いつも百數十臺の人力車が、ずらりと並んでゐたものですが、この爲に、だん〳〵影をひそめ、馬車は、忽ち市内に見ることが出來なくなりました。これと前後して、電車の線路を敷設する準備が、着々ととゝのへられ、八年二月には、先づ、停車場から武藏ケ辻・橋場町を通つて車庫に行く間が出來上りました。それからつぎ〳〵と線路が敷設されて、現在のやうなりつぱな交通網をつくり上げました。

尙、郊外にも電車がどし〳〵開通するやうになりました。大正八年に松任との間に通じたのをはじめ、金石、鶴來、粟ヶ崎へと次々とかけられ、非常に交通が便利になりました。

水道と鋪道

近代都市として、金澤にもう一つ足りないものは水道でした。一体金澤の地は、犀川・淺野川二つの川にはさまれてゐる爲か、良い井戸水がたくさんにあつて、水道の必要はあまりなかつたのですが、人口がふえるにしたがつて、傳染病や火事の災を防ぐには、どうしても、安心して自由に使はれる水道が必要となつて來ました。で、大正九年からその調査に取掛り、昭和二年に至つていよ〳〵工事に着手しました。水源は、

犀川上流の寺津用水を利用し、内徑六十糎の太い鐵管にみなぎらせ、いろ〳〵の仕掛をした所を通してきれいな水とした後、これを、やはり太い鐵管にみちびいて、市内へ引入れたのであります。工事總額四百五十萬圓のこの大工事も、昭和五年にはすつかり出來上つて、家毎の給水栓と、市街の要所々々の消火栓は、市民の健康を守ると共に、不時の災害を防ぐ重要な役割をつとめてくれることになりました。

水道が引かれたのと前後して、市街の大通に、アスフアルトの鋪裝が行はれました。電車通でなくても、商店街は大方鋪裝せられて、鏡のやうな路面を、音もなく流線型の自動車がすべり、青綠色のバスが走る光景は、まことに近代人の新鮮な感じにふさはしいものとなりました。

かうして、金澤市は一歩々々力强く進んで、近代都市の面目を見事に具へて來たのであります。

四　無上の光榮

これまで、主として、維新を境として衰へた金澤が、どうして衰勢を取戻したかについて、二三の例を通して考へて來ましたが、これとは別に、金澤として忘れることの出來ない大きな事がらがあります。それは、天皇陛下の行幸を仰ぎ、皇太子殿下の行啓を忝くしたことなのです。金澤の地は、都を遠く離れてをり、行幸・行啓を仰ぐといふことは、昔から絶えてなかつたのに、維新以後六十年程の間に、四度までも行幸啓があり、熱誠をかたむけてお迎へ申し上げることの出來たのは、まことに無上の光榮と申さねばなりません。

順德上皇の神靈還御

承久の昔、順德上皇の佐渡にお遷りなさる時は、途を北陸におとり遊ばされたことは想像出來ますが、どこをどうお進みになつたか、くはしいことはわかりません。上皇は、北條氏の無道を御憤り遊ばされつゝ、つひにその島でおかくれになりましたことは、まことに恐れ多いきはみでありました。その後、御神靈は、佐渡におまつりしてありましたが、六百五十年たつた明治六年十月、攝津國水無瀨宮におまつりすることになつて、お迎への御使が立ちました。翌七年四月、御行列は、北陸道を御通りになりましたが、この御途中、五月三十日に、金澤で一夜御とゞまり遊ばされました。町の人たちは、この前後三日間、御道筋をきれいにはき清め、國旗を揚げ、簾をかけ、夜は軒下に提灯をつるして、うやまひの心をあらはしました。

明治天皇の行幸

明治十一年の秋には、明治天皇の行幸を仰ぐ光榮に浴しました。この年八月、天皇は、岩倉右大臣以下、多くのお供の人々を從へさせられて東京をお出ましになり、信濃・越後路に、御不自由な行在の御泊をお重ね遊ばされつゝ、十月二日、倶利伽羅峠を越えて、金澤におはいり遊ばされました。始めて天皇の御英姿を仰ぐ町の人々は、深い感激と、赤誠の眞心をあらはして、御道筋に謹んでお迎へ申し上げる中を、御行列は、森下町・橋場町・尾張町と、順路を御通りになつて、行在所南町の中屋彥

明治天皇の行幸

十郎邸へ、御恙なく御到着になりました。天皇は、その日すぐに縣令桐山純孝をお召しになつて、縣内の様子をいろ〳〵とくはしくお聞き遊ばされました。

翌三日は、縣廳・公立第一師範學校（縣廳の西隣）・金澤區裁判所（今、車庫のある所）・勸業博物館（兼六園内）に臨御あらせられ、次いで、上野練兵場に歩兵第七聯隊の演習を御覽になり、引返して金

澤醫學所（大禮記念金澤市立圖書館のある所）に臨御あらせられて、行在所へお還りになりました。

次の日四日は、名古屋鎭臺金澤營所（舊金澤城内）に臨御あらせられ、次いで、撚絲・製絲・銅器の三會社を御覽遊ばされました。

かうして、お休みになるひまもない程のお忙しい二日間をお過しになつて、五日の朝、御機嫌うるはしく金澤を御立ちになり、福井縣へ向かはせられました。奉送の人々は、御道筋一ぱいにみちて、御無事を御祈り申し上げました。

皇太子殿下の行啓

明治の大御代も終り近くなつた四十二年九月には、皇太子殿下（後の

大正天皇）が行啓遊ばされることになりました。明治十一年の行幸以來、久しく行幸啓を拜しなかつたこととて、この御出ましを喜ぶ市民の熱誠は非常なものでした。

殿下には、二十三日御着車、祝砲がひゞき渡る中を、御宿舍成巽閣へ向かはせられました。夜になると、卯辰山に數十發の花火を打上げ、市中一帶のよそほひは、電燈にはえて、見事な美しさを呈しました。

二十四、五、六の三日間、役所・學校・軍隊・會社等を御巡覽になりましたが、その間、御旅情をなぐさめ奉る爲、小學生の提灯行列・運動會、中等學校生徒の提灯行列、其の他、獅子舞・野試合等を御覽に入れました。中にも獅子舞は、金澤特有の勇壯なものであるだけに、御野立所（公園内根上り松附近）に御覽の殿下には、殊の外御滿足の御模樣に拜せられました。

かうして、二十九日、全市民の熱誠御見送り申し上げてゐる中を、金澤驛御發車、富山縣へ向かはせられました。

陸軍特別大演習

大正十三年の秋、北陸の野に陸軍特別大演習が行はれました。その時今上陛下には、攝政殿下として親しく御統監の爲に、十一月一日、東京御出發、二日、大本營と定められた成巽閣に御着きになりました。翌三日から五日までの三日間、頃しも秋草の咲き匂ふ越中・加賀の大平野に、殿下は、御統監として、馬上豐かに御英姿を進めさせられ、三箇師團の將兵が、攻防の秘術をつくして戰ふ有樣を、いとも御熱心にみそなはせられ

ました。そのあとは教育・産業等を御奬勵の思召を以て各所を御巡視遊ばされ、また、功勞者を御召しになつて、拜謁を賜はりました。

五　大金澤の建設へ

さて、こゝまでに、金澤の維新後約七十年の歴史の跡を眺めて來ました。

加賀藩時代、三都に次ぐ大都會であつた金澤は、その住民の多數が、武士及びこれに從ふ階級のものであり、その經濟は、これ等の人々の需要によつて保たれて來ました。明治維新の改革は、忽ち士族の勢力を根こそぎにうばひ去り、その爲に、金澤はひとりでに衰へましたが、軍隊の設置、教育の設備、鐵道の敷設などによつて、追々回復しはじめ、産業が發達するにつれて、だん〳〵榮えて行くやうになりました。しかし他都市が、それ以上に、近代工業や商業の力によつて、ぐん〳〵金澤を追越して發展して行くのを見ますと、金澤市民の心に、鄕土愛の精神が湧起り、これではならんと思つたのであります。

この、金澤人全体の心持が、隣接町村の編入となつてあらはれ、大正十四年に十一屋町及び諸江町方面を編入し、昭和十年十二月、大野町及び鞍月・潟津・米丸・富樫・粟ヶ崎の一町五箇村を同時に編入し、十一年四月には、小坂・三馬・崎浦の三村をも合併して、こゝに、一躍して面積約九十方粁、人口十八萬七千の大都會となりました。久しく伸びかねてゐた金澤も、いよ〳〵伸びる時が來たのであります。この時に當つて、私共に與へられた仕事は、無論、衰退をくひとめる事ではありません。

回復への努力でもありません、たゞ一途に、大金澤の建設を目指して力を捧げる事であります。進軍ラッパの音も高らかに、さあ、しつかり手を取合つて、この大事業に向かつて突進みませう。

金澤のれきし〔終〕

年表（備考　事項欄中、括弧内のものは、本文中にないが、將來もつとくはしい事を研究する時の參考となる事がらである。）

天皇	領主	年號	紀元	事項
後土御門天皇	富樫氏	文明三年	二一三二	蓮如が加賀に來た。
		同七年	二一三五	蓮如が再び加賀に來た。
	御山御坊	長享二年	二一四八	加賀の一向宗徒の勢が大いに振るつた。
		延德中		一向宗徒が富樫政親を亡した。
後奈良天皇		享祿二年	二一八九	御山御坊が建つた。
		天文七年	二一九八	（加賀の一向門徒が大一揆小一揆に分れた）
		同二十年	二二一一	前田利家が尾張荒子に生まれた。
		同二十二年	二二一三	利家が初めて信長に仕へた。
				利家元服、海津の戰に功を立てた。
				謙信が加賀を經て京都を往復した。
				利家が犬千代を改めて孫四郎といつた。

正親町天皇	同二十四年	二二一五	（一向一揆が朝倉氏にまけた）
	弘治二年	二二一六	（加賀と越前と仲直りをした）
			利家が稲生の戰にきづを受けた。
	永祿元年	二二一八	（利家が浮野の戰に功を立てた）
			名を又左衞門と改めた。
	同二年	二二一九	（利家が浪人となつた）
	同三年	二二二〇	（桶狹間の戰に利家が功を立てた）
	同四年	二二二一	利家が森部の戰に足立六兵衞の首をとつた。
			（再び信長に仕へた）
	同七年	二二二四	利家が稲葉城の攻擊に先登した。
	同十年	二二二七	（利家が信長の赤幌（ホロ）の士となつた）
	同十二年	二二二九	（利家が荒子城主となつた）
	元龜元年	二二三〇	富樫晴貞等が傳燈寺で自殺した。
			（利家が近江長濱一萬石に封ぜられた）

	天正二年	二二三四	越前全國が一向一揆の支配となつた。
	同三年	二二三五	織田軍が加賀の江沼・能美二郡を從へた。
	同四年	二二三六	謙信が津幡で加賀軍にまけた。
	同五年	二二三七	謙信が松任まで攻入つた。
	同七年	二二三九	柴田勝家が越前から加賀に攻入つた。
			（白山が噴火した）
佐久間盛政	同八年	二二四〇	佐久間盛政が御山御坊を攻落した。
	同九年	二二四一	利家が能登一國を領した。
前田利家	同十一年	二二四三	賤ヶ嶽の戰。利家が加賀を領した。
	同十二年	二二四四	末森の戰。
			（寶達山の金坑を開いた）
後陽成天皇	同十五年	二二四七	利家が越中を治めた。
	文祿元年	二二五二	尾山城を修築した。
	同四年	二二五五	利家が越中を賜はつた。

	前田利長	慶長四年	二二五九	利家が薨じた。
		同五年	二二六〇	金澤城の内堀を修築した。
		同七年	二二六二	(淺井畷の戰)
		同十五年	二二七〇	(金澤城がやけた)
後水尾天皇	前田利常	同十七年	二二七二	金澤城の外堀が出來た。
		同十九年	二二七四	高岡の諸士の一部が金澤に來た。
				利長が高岡に薨じた。
				(利常が大阪冬の陣に出た)
		元和元年	二二七五	(利常が大阪夏の陣に出た)
		同二年	二二七六	宮腰(金石)往來が出來た。
		同三年	二二七七	寶達山の金鑛を採掘した。
		同六年	二二八〇	金澤城火災。
				(淺野川の下流に堀川を通じた)
		同九年	二二八二	天德院を創立した。

明正天皇		寛永八年	二二九一	(金澤大火、城もやけた)
		同九年	二二九二	金澤の市區を改正した。
		同十一年	二二九三	辰巳用水を金澤城内に引いた。
		同十二年	二二九四	城内玉泉院丸の園池をつくつた。
	前田光高	同十六年	二二九九	金澤の市區を改正した。
		同十七年	二三〇〇	光高が藩主となつた。
後光明天皇	前田綱紀	正保二年	二三〇五	(東照宮を城内につくつた)
		慶安三年	二三一〇	光高が卒し綱紀があとをついだ。
		承應元年	二三一二	(加賀藩士に貸銀を行つた)
				城内に時鐘をおいた。
後西天皇		寛文四年	二三二四	木下順庵が金澤に來て仕へた。
靈元天皇		同十年	二三三〇	石川郡笠舞村に非人小屋をつくつた。
				楠公父子の別れの圖をつくらせた。
				養老の制を定めた。

東山天皇		同十二年	二三三二	室鳩巣が綱紀に仕へた。
		元祿二年	二三四九	芭蕉が金澤に來た。
		同五年	二三五二	綱紀が江戸城で中庸を講じた。
		同十年	二三五七	室鳩巣が金澤に來て住んだ。
中御門天皇		享保四年	二三七九	庶物類纂を幕府に上つた。
	前田吉德	同九年	二三八四	綱紀が薨じた。
桃園天皇	前田重教	寶曆九年	二四一九	(金澤の大火、一萬戸餘り燒けた)
後桃園天皇		安永七年	二四三八	金澤竪町の青物市場を再興した。
光格天皇	前田治脩	天明三年	二四四三	飢饉で金澤の市民に粥をほどこした。
		寛政三年	二四五一	新井白蛾が金澤に來た。
		同四年	二四五二	明倫堂・經武館を開いた。
	前田齊廣	享和二年	二四六二	齊廣が藩主となつた。
		同三年	二四六三	米市場を十間町に開いた。
		文化三年	二四六六	青木木米が金澤に來た。

仁孝天皇		同四年	二四六七	春日山窯が開かれた。
		同五年	二四六八	金澤城がやけた。
		同六年	二四六九	金澤城の二ノ丸御殿が出來上つた。
	前田齊泰	文政五年	二四八二	畫家岸駒が來た。
		同十一年	二四八八	竹澤殿が出來上り、園を兼六と名づけた。(富田景周が殁した)
		天保六年	二四九五	加越能三州測量圖が出來た。
		同九年	二四九八	近藤忠之丞が仇をうつた。(錢屋五兵衞が獄中で死んだ)
孝明天皇		嘉永五年	二五一二	(齊泰が加賀能登の海岸を巡視した)
		同六年	二五一三	大砲小銃を製造した。
		安政元年	二五一四	壯猶館を金澤に開いて軍事の研究を始めた。
		同二年	二五一五	加賀の沖合を外國船が通つた。
		同四年	二五一七	(田中躬之が殁した)

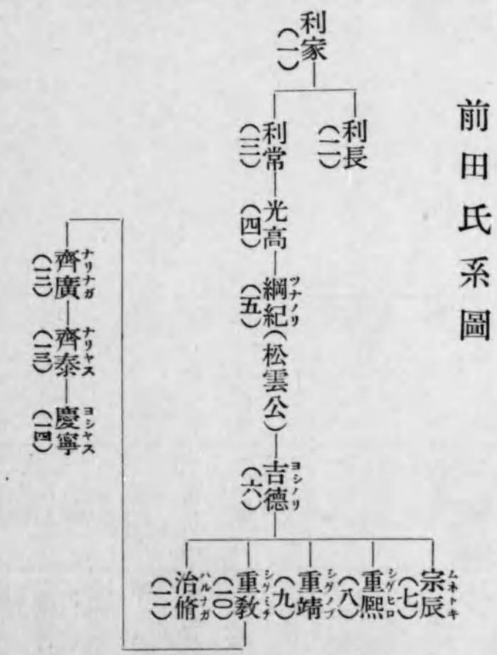
	元治元年	二五二四	勤王の志士が多く刑せられた。
前田慶寧	慶應二年	二五二六	慶寧が藩主となつた。
			加賀藩が軍艦を買入れた。
明治天皇	同三年	二五二七	卯辰山を切りひらいた。
	明治元年	二五二八	撫育所を卯辰山に移した。
			越後の戰に加賀軍が大いに奮戰した。
	同二年	二五二九	加賀藩を改めて金澤藩とした。
			慶寧が藩知事に任ぜられた。
	同三年	二五三〇	卯辰山に顯忠祠が立てられた。
	同四年	二五三一	金澤縣が置かれた。
	同五年	二五三二	縣廳を美川町に移した。
	同六年	二五三三	縣廳を金澤に復した。
			金澤に名古屋鎭臺の分營をおいた。
			尾山神社が出來上つた。

	同七年	二五三四	順德天皇の神靈が還幸遊ばされた。
			前田慶寧が薨じた。
	同八年	二五三五	步兵第七聯隊がおかれた。
			尾山神社の神門が出來上つた。
	同十年	二五三七	步兵第七聯隊が西南役に出征した。
	同十一年	二五三八	明治天皇が行幸遊ばれた。
	同十四年	二五四一	金澤城が燒けた。
	同十七年	二五四四	(關口開が歿した)
	同二十年	二五四七	第四高等中學校開校。
	同二十四年	二五五一	(勤王の士が靖國神社にまつられた)
	同二十七年	二五五四	日清戰役　第七聯隊出征。
	同三十一年	二五五八	小松、金澤、高岡間の鐵道が開通した。
			第九師團司令部が置かれた。
	同三十七年	二五六四	日露戰役　第九師團出征。

大正天皇	同四十一年	二五六八	（森田柿園が歿した）
	同四十二年	二五六九	皇太子殿下行啓。
	大正三年	二五七四	金石電車が開通した。
	同八年	二五七九	金澤の市街電車が開通した。
	同十年	二五八一	金澤高等工業學校が出來た。
	同十二年	二五八三	金澤醫學專門學校が醫科大學に昇格した。（市祭が初めて行はれた）
	同十三年	二五八四	陸軍特別大演習。
			攝政殿下が行啓遊ばされた。
	同十四年	二五八五	粟ヶ崎への電車が開通した。
			十一屋町及び諸江町方面を編入した。
今上天皇	昭和二年	二五八七	歩兵第三十五聯隊が富山へ移つた。
	同五年	二五九一	彦三の町から出火して五百餘戸やけた。
			水道が出來た。

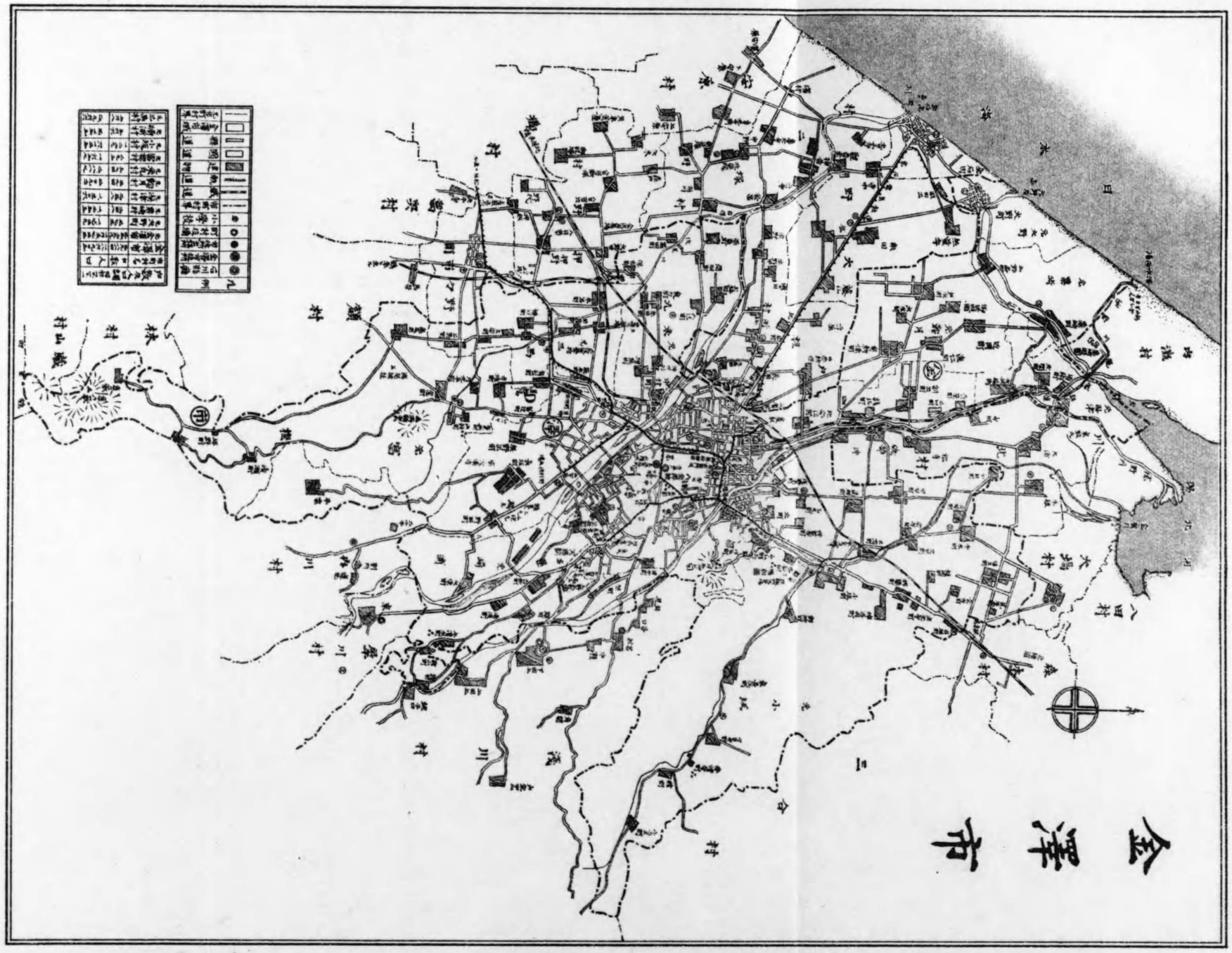
	同七年	二五九二	上海事變が起り第九師團が出動した。（產業と觀光の大博覽會を開いた）
	同十年	二五九五	（招魂社が出羽町練兵場に移された）
			大野町及粟ヶ崎・鞍月・潟津・米丸・富樫の五ヶ村を併合した。
	同十一年	二五九六	小坂・三馬・崎浦の三ヶ村を併合した。

前田氏系圖



歴代金澤市長

一代	稲垣義方
二代	長谷川準也
三代	奥村榮滋
四代	渡瀬政禮
五代	山森隆
六代	飯尾次郎三郎
七代	相良歩
八代	吉川一太郎
九代	片岡安
十代	澤野外茂次

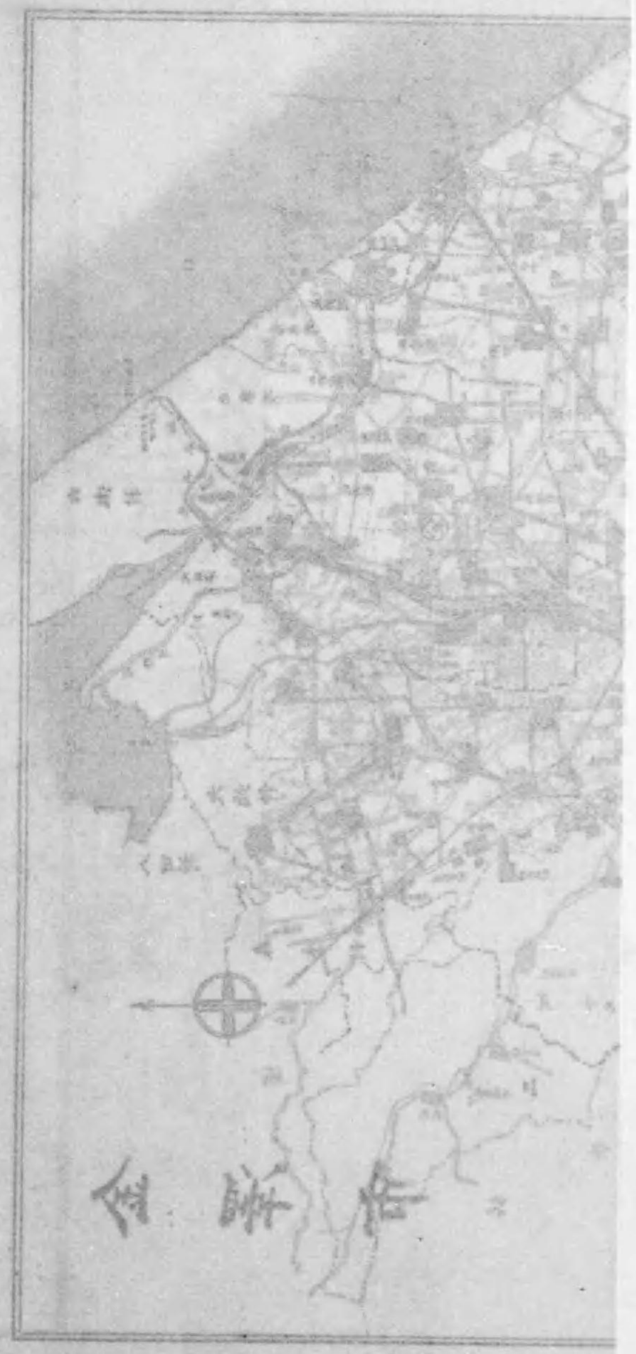


昭和十一年十一月十五日印刷
昭和十一年十一月十九日發行

金澤のれきし
定價五十錢

編纂者　金澤こども文化會
發行者　金澤こども文化會代表者　毎田周治郎　金澤市殿町六十五番地
印刷者　高橋覺吉　金澤市高岡町九十番地
印刷所　明治印刷株式會社　金澤市高岡町九十番地

發行所　金澤市殿町六十五番地　大禮記念金澤市立圖書館内　金澤こども文化會



近刊豫告

名君前田綱紀公

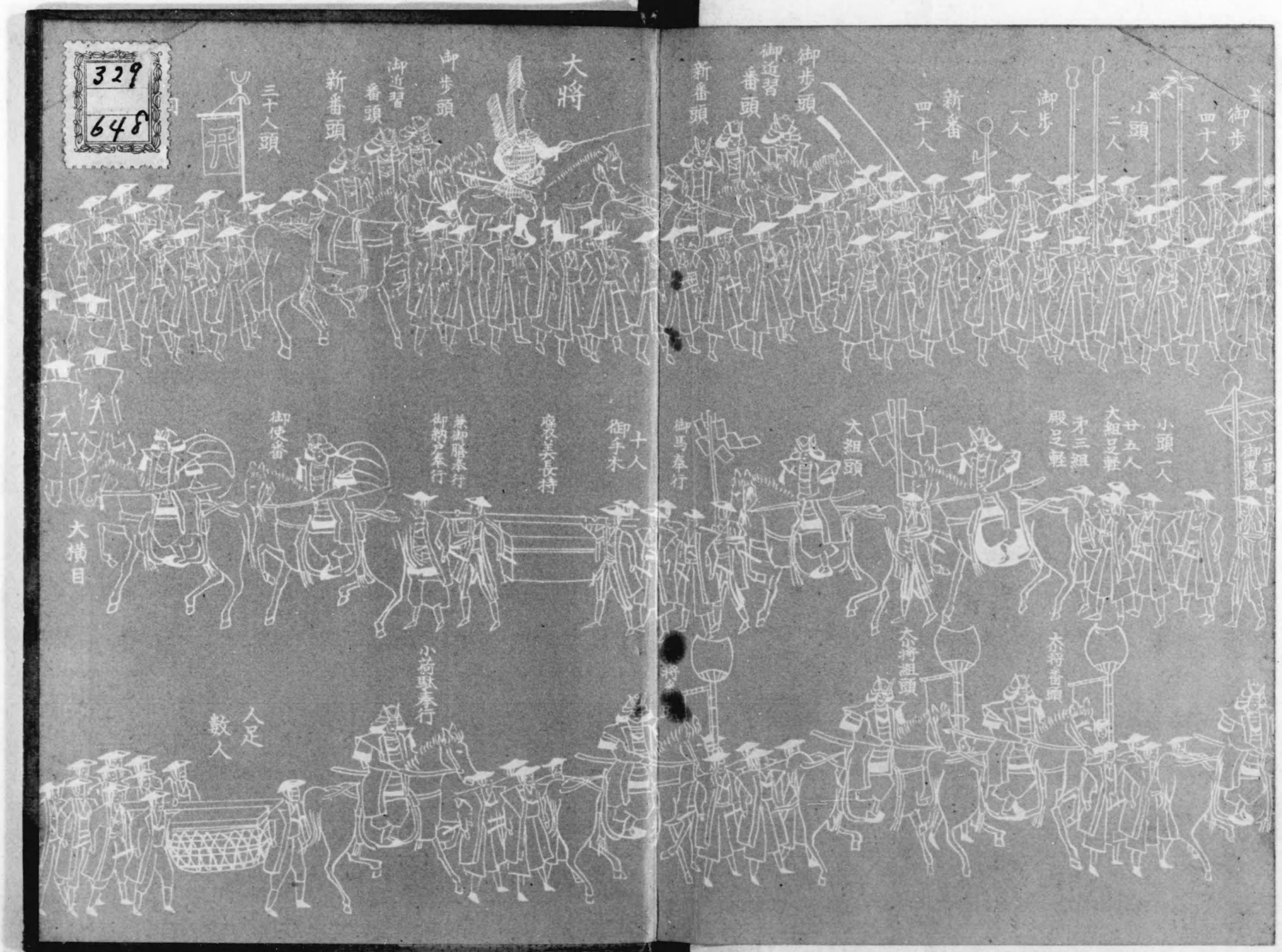
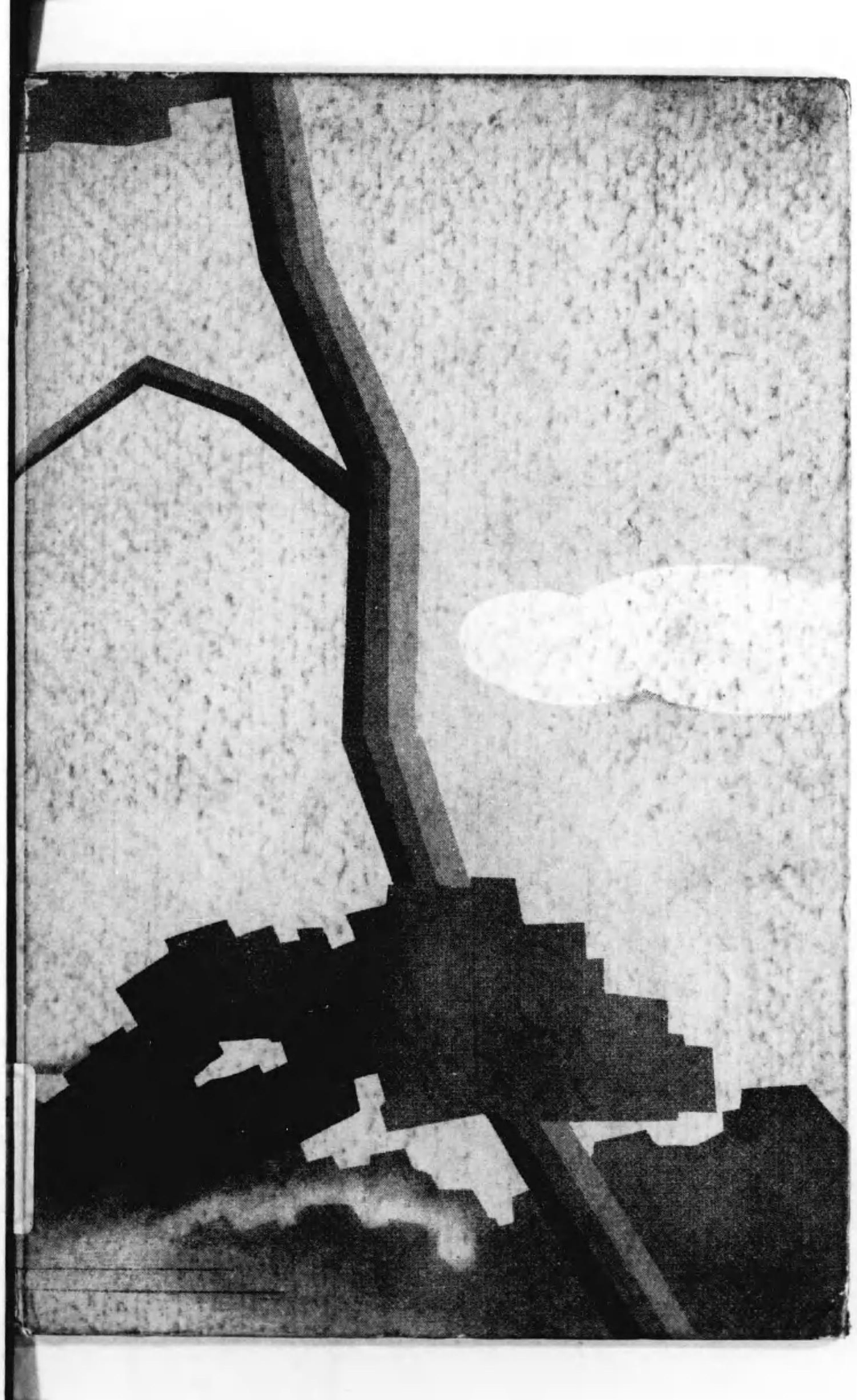
節婦小川直子

金澤の年中行事

加賀の俳句

金澤こどもの文化會編

329
648


三十人頭
新番頭
御近習番頭
御歩頭
大將
新番頭
御近習番頭
御歩頭
新番
四十人
御歩
一人
小頭
二人
御歩
四十人
大横目
御使番
兼御勝手行
御納戸奉行
廣敷長長持
十人
御手木
御馬奉行
大組頭
才三組
殿足輕
廿五人
大組足輕
小頭一人
御足
數人
小荷駄奉行
大持組頭
大持番頭

終